

(財)北九州市芸術文化振興財団
委託調査

北九州芸術劇場
事業評価調査
[報告書]



2011年3月
ニッセイ基礎研究所

◎ はじめに

この報告書は、(財)北九州市芸術文化振興財団から委託を受けて、ニッセイ基礎研究所が実施した「北九州芸術劇場 事業評価調査(その7)」の成果をとりまとめたものである。

近年、行財政改革や説明責任(アカウンタビリティ)への関心の高まりなどを背景に、政府や公共団体の施策や事業を評価する「政策評価」が広がっており、地方公共団体においても、政策評価から施策評価、事務事業評価という評価体系が定着している。しかし、文化施設や文化事業の評価には、その特性を踏まえた独自の評価体系や指標が必要であるという認識が定着しつつある。そうした中、北九州芸術劇場は、2003年度の開館当初から独自の事業評価調査に継続的に取り組み、かつ、その成果を公開しており、公立文化施設の事業評価モデルとして全国から注目されている。

7年目にあたる2009年度調査では、継続調査として①劇場の運営データの分析、②主催事業および提携・協力事業公演の観客アンケート調査、③貸館利用に関するアンケート調査、④経済波及効果とパブリシティ効果の試算を実施した。またテーマ調査として、九州圏域の文化施設や文化政策の担当者、劇団主宰者等へのグループインタビュー、首都圏の代表的な公共劇場の制作責任者を交えた座談会を実施し、九州圏域の拠点劇場としての役割、公共劇場としての実績や今後の事業の方向性などに関する意見聴取を行った。

7年間の継続的な調査結果からは、北九州芸術劇場が着実に成果をあげ、北九州市の芸術文化の創造拠点・発信拠点として、鑑賞者や利用者、さらに全国の劇団やカンパニー等から広く認知、支持されていることがうかがえる。こうした劇場の高い評価は、九州圏域ばかりか首都圏の公立劇場や舞台芸術関係者へのグループインタビュー調査からも明らかとなった。

末筆ではあるが、2003年度以降、7ヶ年にわたり、この貴重な調査の機会を与えていただいた(財)北九州市芸術文化振興財団、劇場スタッフの方々、ならびに調査にご協力いただいた観客や利用者の方々、そして、グループインタビュー調査にご協力いただいた関係者の方々に心より感謝申し上げますとともに、本調査の成果が今後の北九州芸術劇場の運営に有効に活用され、より一層、意義のある事業や活動が展開されることを願うものである。

2011年3月

ニッセイ基礎研究所

芸術文化プロジェクト室

◎ 目次

序章 調査研究の目的・内容と本報告書の構成	i
-----------------------------	---

[本編]

第1章 2009年度事業の概要と実績	3
第2章 観客の特性と観客からみた評価	13
第3章 貸館利用者からみた評価	21
第4章 経済波及効果とパブリシティ効果	26
第5章 北九州芸術劇場の広域的役割と長期的ビジョン ——グループインタビュー調査の結果から	31
第6章 評価フレームに基づいた事業評価結果	35

[資料編]

資料Ⅰ 観客調査結果	資-1
資料Ⅱ 貸館利用者調査結果	資-55
資料Ⅲ 経済波及効果	資-85
資料Ⅳ パブリシティ一覧	資-99
資料Ⅴ グループインタビュー調査結果(概要)	資-107

序章 調査研究の目的・内容と本報告書の構成

1. 調査研究の目的・内容

(1) 調査研究の目的

本調査研究は、2003年8月に開館した北九州芸術劇場について、毎年、事業や運営の評価に関する調査を行うとともに、その調査結果に基づいて、より良い劇場運営のあり方を検討することを目的としている。

7年目にあたる2009年度は、03年度あるいは04年度から継続して実施している、次の4つの調査(「継続調査」)

- ①劇場運営に関する基礎データの収集・分析
- ②公演に来場した観客を対象としたアンケート調査による公演事業に関する評価
- ③貸館利用者を対象としたアンケート調査による施設利用に関する評価
- ④北九州芸術劇場の経済波及効果とパブリシティ効果の算出

を実施した。さらに09年度の「テーマ調査」として、

⑤九州圏域及び首都圏の公共劇場、舞台芸術関係者へのグループインタビュー調査を行い、北九州芸術劇場の広域的な役割や公共劇場としての事業の方向性に関する意見を整理した。

(2) 調査の内容

①劇場運営基礎データの収集・分析

事業数、公演回数、入場者・参加者数、施設稼働率など、劇場運営に関する基礎データを整理し、03年度から7ケ年の経年分析を行なった。

②公演に来場した観客に対するアンケート調査

北九州芸術劇場の自主事業と提携・協力事業公演の観客を対象に、以下の2つの視点に基づいたアンケート調査を実施した(詳細は、p.資-1～資-54参照)。

- 事業評価の基礎となる北九州芸術劇場の施設やサービス、公演内容等に関する観客の満足度、ニーズの把握
- 劇場運営の基礎となる観客の属性(年齢、性別、居住地)、北九州芸術劇場における鑑賞行動(情報入手経路、鑑賞の動機、北九州芸術劇場での鑑賞回数)、日頃の鑑賞行動(鑑賞頻度、鑑賞ジャンルなど)など、観客特性の把握

③貸館利用者を対象としたアンケート調査の分析

貸館利用者を対象に05年度から実施している「施設利用に関するアンケート調査」の結果について、09年度分をとりまとめた(詳細は、p.資-55～資-83参照)。

④経済波及効果、パブリシティ効果の把握分析

産業連関表を用いて、劇場の事業や運営がもたらす経済波及効果を試算するとともに、雇用効果の把握を行なった(詳細は、p.資-85～資-97参照)。また、パブリシティ効果について、その概要を整理し、金額換算による規模を算出した(詳細は、p.資-99～資-106参照)。

⑤九州圏域及び首都圏の公共劇場、舞台芸術関係者へのグループインタビュー調査

グループインタビュー調査は、(1)九州圏域の拠点となる公立劇場としての北九州芸術劇場の役割、(2)創造拠点としての北九州芸術劇場の事業への評価、以上2つのテーマを設定し、以下の要領で実施した。

具体的には、九州圏域の文化政策や公立文化施設の職員、劇団主宰者や制作者などを対象にしたグループインタビュー(主に(1)のテーマについて)と、創造活動に取り組む首都圏の代表的な公共劇場の制作責任者2名と北九州芸術劇場の館長を交えた座談会((1)と(2)のテーマについて)を実施し、以下の項目について意見聴取を行った。

- 北九州芸術劇場の運営方針(創る・育つ・観る)と事業・運営の実績について
- 北九州芸術劇場が九州圏域の劇場・ホールや文化政策等にもたらした変化や効果
- 九州圏域における舞台芸術やホール・劇場の現状と今後の展望、連携の可能性
- 国の文化政策の動きと今後の展望 等

2. 本報告書の構成

本報告書は、各調査結果の概要、ならびに事業評価の基本フレームと評価結果を整理した「本編」と、調査の詳細データ等を整理した「資料編」の二編から構成されており、それぞれの内容は以下のとおりである。

(1) 本編

本編は、それぞれ次の内容からなる6つの章によって構成されている。

- 「第1章 2009年度事業の概要と実績」
劇場運営の基礎データならびに事業収支を整理した。
- 「第2章 観客の特性と観客からみた評価」
自主事業と提携・協力事業公演に来場した観客に対するアンケート調査の結果から、①観客の属性、②公演や劇場に関する意見(公演やサービスへの満足度など)、③日頃の鑑賞行動について、整理・分析を行った。
- 「第3章 貸館利用者からみた評価」
貸館利用者に対するアンケート調査の結果から、①劇場の施設、運営や対応に関する満足度、②重視項目について、調査結果の整理・分析を行った。
- 「第4章 経済波及効果とパブリシティ効果」
産業連関表を用いた経済波及効果、雇用効果、新聞掲載記事の金額換算によるパブリシティ効果を算出した。
- 「第5章 北九州芸術劇場の広域的役割と長期的ビジョン——グループインタビュー調査の結果から」
グループインタビュー及び座談会で得られた主要な意見から、北九州芸術劇場の広域的な役割と長期的なビジョンを整理した。
- 「第6章 評価フレームに基づいた事業評価結果」
第1章から第5章までの調査結果を総合的に分析するため、次の評価フレームに沿って調査や評価の結果、改善のポイントなどを整理した。

A 劇場の設置目的:

鑑賞系事業、創造系事業、普及系事業、市民文化活動の支援、地域への貢献

- B 運営・管理：場の提供・支援、施設のホスピタリティやサービス、施設の維持管理
- C 経営：経営体制、リサーチ&マーケティング、経営努力

(2) 資料編

本編で整理・分析した調査の手法、結果などをとりまとめ、資料編として掲載した。

- 資料Ⅰ「観客調査結果」では、09年度の自主事業と提携・協力事業公演に来場した観客を対象に実施したアンケート調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅱ「貸館利用者調査結果」では、05年度～09年度の5ケ年の調査結果を、設問ごとに整理した。
- 資料Ⅲ「経済波及効果」では、09年度の経済波及効果の基本構造、事業ごとの最終需要と消費支出など、経済波及効果、雇用効果算出のための分析資料を掲載した。
- 資料Ⅳ「パブリシティ一覧」では、金額換算の基礎となった09年度の新聞記事データの一覧を掲載した。
- 資料Ⅴ「グループインタビュー調査結果(概要)」では、グループインタビュー及び座談会の主要な意見を抜粋・整理して掲載した。

◎ 調査研究体制

ニッセイ基礎研究所

吉本光宏(主席研究員・芸術文化プロジェクト室長)

柄田明美(芸術文化プロジェクト室 研究員)

大澤寅雄(芸術文化プロジェクト室 研究員)

北九州芸術劇場
事業評価調査
[本編]

第1章 2009年度事業の概要と実績

本章ではまず、事業評価の基本となる北九州芸術劇場の事業の概要、入場者数や稼働率、収支状況など、2009年度の事業の実績について、過去データとともに整理した。

1. 事業の実績

まず、北九州芸術劇場の事業の基本方針と09年度の事業概要は次のとおりである。

(1) 事業の基本方針

北九州芸術劇場では、「創る」「育つ」「観る」をキーワードにした事業展開が行われている。それぞれの目的や考え方、事業の内容は次のとおりである。

- **【創る】**: 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。
- **【育つ】**: アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。
- **【観る】**: 見る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

(2) 事業の内容と実績、入場者数

- 09年度もこうした3つのコンセプトに基づき、自主事業全体で、28本の事業・280回の公演数・アクティビティが行われ、42,672人が公演鑑賞やアクティビティに参加した(図表1-1)。

図表1-1 事業実績の概要(03年度～09年度)

【事業数・公演数・入場者数】

	2003年度			2004年度			2005年度			2006年度		
	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数
創造事業	3	35	13,350	4	15	3,292	6	45	9,332	7	61	27,107
公演事業	15	35	22,079	23	46	26,361	24	42	21,294	18	45	29,813
提携・協力事業	5	8	7,382	6	15	6,211	6	13	6,642	7	16	7,259
オープニング企画	2	2	1,592	—	—	—	—	—	—	—	—	—
演劇祭	2	9	987	2	9	1,231	2	7	2,779	2	8	1,110
公演事業 計	27	89	45,390	35	85	37,095	38	107	40,047	34	130	65,289
	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数
学芸事業	—	219	2,404	—	320	4,734	—	297	6,327	—	291	6,758
総合計	27	308	47,794	35	405	41,829	38	404	46,374	34	421	72,047
公演事業の総 座席数と入場率	総席数	入場率		総席数	入場率		総席数	入場率		総席数	入場率	
	50,756	89.4%		41,808	88.7%		48,575	82.4%		70,065	92.7%	

	2007年度			2008年度			2009年度		
	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数	事業数	公演数	入場者数
創造事業	5	24	5,224	8	41	12,320	6	40	12,841
公演事業	22	49	32,378	15	33	18,164	16	42	19,439
提携・協力事業	11	28	11,869	5	12	3,895	5	16	3,947
演劇祭	3	8	1,724	1	28	1,689	1	7	556
公演事業 計	41	109	51,195	29	114	36,068	28	105	36,783
	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数	事業数	回数	参加者数
学芸事業	—	283	6,200	—	279	10,577	—	175	5,889
総合計	41	392	57,395	29	393	46,645	28	280	42,672
公演事業の総 座席数と入場率	総席数	入場率		総席数	入場率		総席数	入場率	
	60,036	85.3%		41,580	82.7%		39,225	93.8%	

※2008年度は、演劇祭は総座席数の設定をしていないため、演劇祭入場者数は入場率の算出から除いている。

- 以下、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業ごとに、事業の内容と実績をとりまとめた。(09年度事業の実績一覧を図表1-2に整理した。)

①創る:創造事業

- 「創る」に対応した創造事業では、
 - 北九州芸術劇場プロデュースとして全国に発信する作品、「江戸の青空～Keep On Shackin'～」 「ハコブネ」
 - 市民参加型の創造事業である、合唱物語「わたしの青い鳥2009」、「北九州パントマイム教室」
 - 演劇界の第一線で活躍する演出家を招き、地域の俳優によって国内外の魅力的な戯曲をリーディングとして上演する「リーディングセッション」
 - 期間限定の劇団を作り、スタッフワークや演技のための講座を受講し、創造を体験する「シアターラボ2010」といった事業が実施された。
- 「江戸の青空～Keep On Shackin'～」は北九州(4回)・東京(15回)、「ハコブネ」は北九州(8回)・東京(3回)での公演が行われた。
- 09年度は6事業で40回の公演が行われ、入場者数は12,841人となっている。08年度と比べると、事業数が2本、公演数が1回減少したものの、入場者数は増えている(図表1-1)。
- 創造事業は入場率が高いプログラムが多く、「北九州パントマイム教室」、「シアターラボ2010」の入場率は100%を超えた。「江戸の青空」「ハコブネ」と合唱物語「わたしの青い鳥」も入場率も90%を超え、市民からの支持の高さがうかがえる。(図表1-2)。

②育つ:学芸事業

- 「育つ」に対応した学芸事業では、
 - ワークショップや講座等の事業として、「劇場塾」、「月1ダンス部」、「バックステージツアー」、「チャレンジ! えんげき」、「高校生のための演劇塾」
 - 学校でのアウトリーチ事業として「ドラマ・ワークショップ」や「学校出前演劇ワークショップ」、「公共ホール演劇ネットワーク事業」などの、演劇や人形劇のワークショップ
 - 市民センターでの小学生から一般市民を対象としたアウトリーチ事業として、「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」
 - 創造参加として、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」
 など、学芸事業全体では、創造参加も含め、12事業で175回のアクティビティが実施され、参加延人数・入場者数は5,889人となっている(図表1-1)。
- 08年度と比べると、アクティビティの回数、参加者数がともに減少している(08年度の実績は279回、10,577人)。減少した要因としては、08年度まで実施してきた「表現教育推進事業」(特定の小学校での4～6年生を対象とした継続した取り組み)から、1つの学校での回数を抑えて実施する学校を広げるように方針を転換したことが大きい。

③観る:公演事業

- 「観る」に対応した主催公演事業では、大規模な商業演劇・ミュージカル公演から、大人計画、NYLON100℃、劇団、本谷有希子などの若者に人気の高い小劇場・現代演劇公演、山海塾のダンス・現代舞踊公演、「月猫えほん音楽会」や「子どものためのシェイクスピア」といった子どもを対象とした公演など、幅広い観客層を対象とした公演が実施された。

- 09年度に新たに始まった北九州芸術劇場が注目する演劇人たちをバックアップする「ツドエmeets北九州」では、単なる招聘公演ではなく、劇場とカンパニーが人材・技術を交流させながらネットワークを広げ、カンパニーの事情に応じた柔軟な支援を行なった。
- 公演事業では16作品が上演され、公演数は42回、入場者数は19,439人となっている。08年度と比べると、公演数、入場者数ともに増加している(図表1-1)。公演事業の入場率は95.0%と高く、16本のうち14本は90%以上を、4本が100%以上を確保している(図表1-2)。
- 提携・協力事業では、伝統芸能や小劇場・現代演劇など6作品が上演され、公演数は16回であった。08年度と比べると、公演数、入場者数ともに増加している。
- 創造事業、公演事業、提携・協力事業、フェスティバルを含めた公演事業全体の公演作品数は28本、公演数は105回、入場者数は36,783人である。08年度と比べて、公演事業の本数や公演回数を抑制しながら、入場者数は増加させていることが分かる(図表1-1)。

図表1-2 北九州芸術劇場 自主事業実績一覧(09年度)

1 創造事業

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	「江戸の青空～Keep On Shackin'～」 「東京公演」	世田谷パブリックシアター	5/24～6/7	15	8,250	7,815	95%
	「江戸の青空～Keep On Shackin'～」 「北九州公演」	中劇場	6/12～14	4	2,420	2,351	97%
	計			19	10,670	10,166	95%
2	合唱物語「わたしの青い鳥」2009	中劇場	7/12	1	414	388	94%
3	北九州パントマイム教室	創造工房	8/26～30	1	38	41	108%
4	北九州芸術劇場リーディングセッションvol.14「甘い丘」	小劇場	9/12・13	2	268	240	90%
	北九州芸術劇場リーディングセッションVol.15「番町皿屋敷」	小劇場	11/21・22	2	306	270	88%
	計			4	574	510	89%
5	北九州芸術劇場プロデュース「ハコブネ」 「北九州公演」	小劇場	2/23～28	8	872	807	93%
	北九州芸術劇場プロデュース「ハコブネ」 「東京公演」	あうるすぽっと	3/5～7	3	678	643	95%
	計			11	1,550	1,450	94%
6	シアターラボ2010	創造工房	3/26～28	4	284	286	101%
	計			40	13,530	12,841	95%

2 公演事業

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	NYLON100℃ 33rd SESSION「神様とその他の変種」	中劇場	5/30・31	3	1,686	1,515	90%
2	月猫えほん音楽会2009	中劇場	7/30	1	618	582	94%
3	子どものためのシェイクスピア「マクベス」	中劇場	8/9	1	594	542	91%
4	劇団、本谷有希子第14回公演「 ^{ライライライライ} 来来来来」	中劇場	8/25	1	594	626	105%
5	「BLACKBIRD」	中劇場	8/29・30	3	1,770	1,742	98%
6	「万作・萬斎」狂言	中劇場	9/9・10	3	2,022	1,754	87%
7	ツドエmeets北九州vol. 1 「宵の唇」	小劇場	9/25～27	5	530	392	74%
	ツドエmeets北九州vol. 2 ハイバイ「て」	小劇場	10/24・25	3	360	272	76%
	ツドエmeets北九州vol. 3 劇団Ugly duckling 「照準Zero in」	小劇場	2/6・7	2	192	153	80%
	計			10	1,082	817	76%
8	大人計画「サッチャんの明日」	中劇場	10/23～25	4	2,376	2,335	98%
9	山海塾「卵を立てることから一卵熟」	中劇場	11/1	1	438	412	94%
10	翻案劇「サロメ」	中劇場	11/3	1	606	626	103%
11	『人形劇俳優“たいらじょう”の世界』	中劇場	11/14・15	2	637	629	99%
12	「小松政夫とイッセー尾形のびーめん生活in小倉」	中劇場	11/28・29	2	1,242	1,178	95%
13	国盗人-W. シェイクスピア「リチャード三世」より	中劇場	12/22・23	2	1,146	1,168	102%
14	ラップ屋第35回公演「世界の秘密と田中」	小劇場	1/23・24	2	290	279	96%
15	ブロードウェイミュージカル「キャバレー」	大ホール	2/20・21	3	3,465	3,468	100%
16	「なにわバタフライN. V」	中劇場	3/5～7	3	1,806	1,766	98%
	計			42	20,372	19,439	95%

3 北九州演劇フェスティバル

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	北九州演劇フェスティバル2010「語る演劇」	小劇場ほか	3/1～14	7	620	556	90%

4 提携・協力事業

	公演名	会場	公演日	公演数	設定席数	入場者数	入場率
1	松本清張生誕100年記念事業 或る「小倉日記」伝	中劇場	10/2～4	3	2,100	1,800	86%
2	春風亭小朝独演会	大ホール	10/9	1	1,269	1,010	80%
3	青年団 第60回公演「カガクするココロ」	小劇場	11/28・29	2	264	183	69%
	青年団 第60回公演「北限の猿」	小劇場	11/28・29	2	264	170	64%
	計			4	528	353	67%
4	飛ぶ劇場 vol. 30 「彼女のすき間」	小劇場	12/10～13	6	576	553	96%
5	南河内万歳一座「似世物小屋(にせものごや)」	小劇場	1/16・17	2	230	231	100%
	計			16	4,703	3,947	84%

合計(創造・公演・提携・協力事業・フェスティバル)				105	39,225	36,783	94%
---------------------------	--	--	--	-----	--------	--------	-----

5 学芸事業

	事業名	会場	実施月	回数	対象	参加延人数・入場者数	受講(入場)者数
1	劇場塾(俳優講座)	創造工房	5/2・3	2	一般	60	30
	劇場塾(戯曲講座①)	創造工房	7/13、8/10	2	一般	22	11
	劇場塾(戯曲講座②)	創造工房	8/26、9/2	2	一般	16	8
	劇場塾(舞台美術WS)	創造工房	10/2・3	2	一般	24	12
	計			8		122	61
2	教育普及事業「学校出前演劇ワークショップ:うっかり、ちよっと、きのこ島」	朽網小学校	9/28	1	小学3年生	67	67
	教育普及事業「学校出前演劇ワークショップ:うっかり、ちよっと、きのこ島」	足立小学校	9/29	1	小学3年生	52	52
	計			2		119	119
3	子どものための演劇ワークショップ「チャレンジ! えんげき2009」	小劇場	7/21～26	6	小学3～6年生	186	31
	「 (発表)	小劇場	7/26	1	一般	121	121
	計			7		307	152
4	「高校生のための演劇塾2009」	大ホール・中劇場 小劇場・創造工房	8/5～7	6	高校生	306	51
5	エンゲキで私イイキ、地域イイキ①	湯川市民センター	11/7・8	2	中学生～一般	48	24
	エンゲキで私イイキ、地域イイキ②	修多羅市民センター	11/21・22	2	小学4年生～一般	36	18
	エンゲキで私イイキ、地域イイキ③	枝光北市民センター	11/28・29	2	中学生～一般	44	22
	エンゲキで私イイキ、地域イイキ④	貴船市民センター	12/5・6	2	小学4年生～一般	38	19
	エンゲキで私イイキ、地域イイキ⑤	大里東市民センター	12/19・20	2	小学4年生～一般	44	22
	エンゲキで私イイキ、地域イイキ⑥	塔野市民センター	1/16・17	2	小学4年生～一般	46	23
	エンゲキで私イイキ、地域イイキ⑦	沢見市民センター	1/23・24	2	小学4年生～一般	48	24
	計			14		304	152
6	教育普及事業「ドラマ・ワークショップ」①	江川小学校	10・11月	4	小学5年生	228	57
	教育普及事業「ドラマ・ワークショップ」②	徳力小学校	1/15・19・22・26	4	小学4年生	340	85
	教育普及事業「ドラマ・ワークショップ」③	青山小学校	1/21・28、2/4・12	4	小学4年生	216	54
	教育普及事業「ドラマ・ワークショップ」④	天籟寺小学校	1・2月	5	小学6年生	230	46
	教育普及事業「ドラマ・ワークショップ」⑤	桜丘小学校	2/2・9・22・24	4	小学4年生	228	57
	教育普及事業「ドラマ・ワークショップ」⑥	桜丘小学校	1/27、2/1・8・18	4	小学5年生	264	66
	計			25		1,506	365
7	月1ダンス部「コンテポラリー・ダンスを見て聞いて知る講座」	創造工房	4/18	1	一般	39	39
	月1ダンス部「コンテポラリー・ダンスを見て聞いて知る講座」	ギャラリーSOAP	4/18	1	一般	37	37
	月1ダンス部「踊るカラダを楽しもう」	創造工房	5/22・23	3	一般	89	89
	月1ダンス部「おやじダンスワークショップ」	小劇場	6/14	1	中高年男性	24	24
	月1ダンス部「体はオモチャ」	小劇場	6/14	1	一般	27	27
	月1ダンス部「親と子のためのワークショップ」	創造工房	6/20	1	親子	16	16
	月1ダンス部「バレエクラス」	創造工房	6/20	1	バレエ経験者	17	17
月1ダンス部「コンテポラリーダンスワークショップ～身体の内と外」	創造工房	7/4・5	2	一般	27	27	

7	月1ダンス部「タップ！～リズムをつくる」	創造工房	9/12	1	中学生	19	19
	月1ダンス部「タップ！～リズムをつくる」	創造工房	9/12	1	一般	31	31
	月1ダンス部「タップ！～リズムをつくる」	創造工房	9/13	1	小学1～3年生	17	17
	月1ダンス部「タップ！～リズムをつくる」	創造工房	9/13	1	小学4～6年生	12	12
	月1ダンス部「おやじダンスワークショップ」	創造工房ほか	10/4～25	10	中高年男性	200	20
	月1ダンス部「タップ！～リズムをつくる」	創造工房	10/31	2	一般	39	39
	月1ダンス部「タップ！～リズムをつくる」	創造工房	11/1	2	小学生	18	18
	月1ダンス部「親と子のためのワークショップ」	創造工房	12/19	1	親子	22	22
	月1ダンス部「一般ワークショップ」	創造工房	12/19	1	一般	29	29
	計			31		663	483
8	バックステージツアー2009「劇場探検隊09…大ホールの達人を目指せ！」	大ホール	8/20～22	8	小学3年生～一般	220	220
	バックステージツアー2009「劇場探検隊09…中劇場の秘密を体験せよ！」	中劇場	12/26・27	4	小学1年生～一般	125	125
		計			12		345
【創造・公演(アウトリーチ&ワークショップ)参加】							
9	合唱物語「わたしの青い鳥」2009	中劇場ほか	5/29～7/12	15	小学3年生～一般	1,020	68
	合唱物語「わたしの青い鳥」2009(アウトリーチ)	小池特別支援学校	5/29	1	小学生	25	25
10	北九州パントマイム教室	創造工房	8/26～30	5	一般	95	19
11	演劇ネットワーク事業『人形劇俳優“たいらじょう”の世界』アウトリーチ	小倉中央小学校	11/10	2	小学3年生	63	63
	演劇ネットワーク事業『人形劇俳優“たいらじょう”の世界』アウトリーチ	新導寺小、市丸小	11/11	1	小学3年生	26	26
	演劇ネットワーク事業『人形劇俳優“たいらじょう”の世界』ワークショップ	こども文化会館	11/11～12	2	一般	64	32
12	シアターラボ2010	創造工房ほか	11/23～3/28	44	一般	924	21
		計			70		2,217
合計(学芸事業)				175		5,889	1,982
総 計				280		42,672	

④貸館事業

- 貸館事業では、市主催事業、財団主催事業も含め、09年度に公演や講演など、計233事業が開催された。公演・講演数は320回、貸館事業の入場者数は166,922人となっている。

⑤利用者数、利用件数

- 観客だけではなく、主催事業の出演者や関係者、貸館事業の利用者などを含めた北九州芸術劇場の利用者数、利用件数は図表1-3のとおりで、09年度には自主事業、貸館事業合わせて1,646件の利用があり、利用者数は約29万人となっている。そのうち、自主事業での利用件数は595件、利用者数は約4万人。貸館事業での利用件数は1,051件、利用者数は約24万人である。
- 08年度と比べて自主事業による利用件数が少なくなっている一方、貸館事業で増えており、自主事業と貸館事業を含めた合計は、利用件数はやや少ないものの、利用者数はほぼ例年とおりの数字となっている。

図表1-3 利用者数、利用件数(03年度～09年度)

	2003年度				2004年度				2005年度			
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計
自主事業	23,937 (66)	22,890 (143)	7,402 (121)	54,229 (330)	22,445 (87)	29,970 (242)	16,996 (404)	69,411 (733)	13,034 (102)	33,153 (289)	14,592 (471)	60,779 (862)
貸館事業	93,100 (205)	41,524 (145)	10,769 (99)	145,393 (449)	175,273 (482)	71,901 (325)	13,626 (176)	260,800 (983)	160,673 (467)	55,644 (229)	10,478 (130)	226,795 (826)
合計	117,037 (271)	64,414 (288)	18,171 (220)	199,622 (779)	197,718 (569)	101,871 (567)	30,622 (580)	330,211 (1,716)	173,707 (569)	88,797 (518)	25,070 (601)	287,574 (1,688)

	2006年度				2007年度				2008年度			
	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計	大ホール	中劇場	小劇場	計
自主事業	26,027 (139)	29,814 (298)	15,651 (573)	71,492 (1,010)	34,015 (186)	29,182 (325)	17,837 (564)	81,034 (1,075)	17,877 (134)	17,699 (217)	14,661 (462)	50,237 (813)
貸館事業	134,966 (382)	55,050 (244)	8,853 (146)	198,869 (772)	132,444 (381)	58,491 (237)	10,772 (148)	201,707 (766)	133,686 (365)	77,324 (327)	17,281 (226)	228,291 (918)
合計	160,993 (521)	84,864 (542)	24,504 (719)	270,361 (1,782)	166,459 (567)	87,673 (562)	28,609 (712)	282,741 (1,841)	151,563 (499)	95,023 (544)	31,942 (688)	278,528 (1,731)

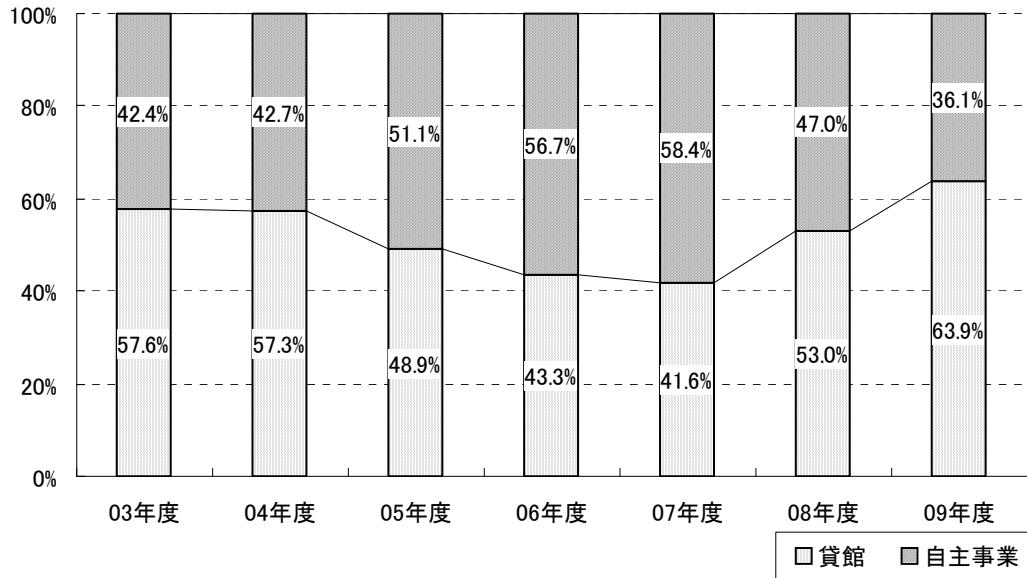
	2009年度				累計
	大ホール	中劇場	小劇場	計	
自主事業	7,625 (64)	22,087 (213)	12,873 (318)	42,585 (595)	429,767 (5,418)
貸館事業	138,611 (415)	86,166 (369)	18,186 (267)	242,963 (1,051)	1,504,818 (5,765)
合計	146,236 (479)	108,253 (582)	31,059 (585)	285,548 (1,646)	1,934,585 (11,183)

* 上段の数字が利用者数(単位:人)、下段()内の数字は利用件数

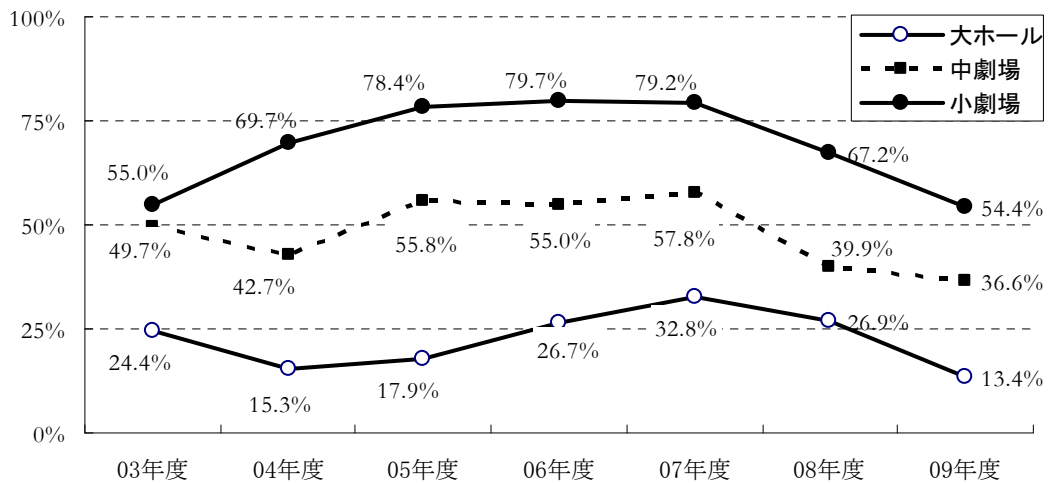
- 自主事業と貸館事業の比率を利用件数ベースで見ると、09年度は、自主事業が36.1%、貸館事業が63.9%と、貸館事業の利用割合が高くなっている(図表1-4)。
- ホールの規模別にみると、大ホールで貸館事業での利用が多く、中劇場と小劇場で自主事業の利用が多いことは、03年度からの変わらない傾向だが、09年度は自主事業利用の比率がこれまでの実績で最も低く、07年度を境として貸館事業の利用が伸びていることが分かる(図表1-5)。

- 小劇場の自主事業比率が高いのは、リーディングセッションやシアターラボをはじめとする創造事業・創造参加の場として活用しているためであり、3つの劇場それぞれの役割と用途が明確になっているものと考えられる。

図表1-4 自主事業・貸館事業比率 [件数ベース] (03年度～09年度)



図表1-5 ホール別の自主事業比率 [件数ベース] (03年度～09年度)



(3) 施設稼働率

- 北九州芸術劇場の09年度の施設稼働率は、大ホールが74.0%、中劇場が81.5%、小劇場が78.4%である(図表1-6)。
- 3つのホールの稼働率は、開館年の03年度を除き、約70～80%で推移しており、2010年度の(財)地域創造の悉皆調査結果(2010年10月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72.2%)と比較して高い水準にある。
- 中劇場は、04年度以降で最も高い81.5%の高い稼働率となっている。

図表1-6 北九州芸術劇場の稼働率(03年度～09年度)

	2003年度			2004年度			2005年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	99	100	83	219	207	220	223	189	222
利用対象日数	103	107	86	277	283	304	281	276	297
稼働率	96.1%	93.5%	96.5%	79.1%	73.1%	72.4%	79.4%	68.5%	74.7%

	2006年度			2007年度			2008年度		
	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	202	199	254	220	205	257	192	203	249
利用対象日数	285	282	306	290	289	300	257	260	295
稼働率	70.9%	70.6%	83.0%	75.9%	70.9%	85.7%	74.7%	78.1%	84.4%

	2009年度		
	大ホール	中劇場	小劇場
公演日数	194	212	221
利用対象日数	262	260	282
稼働率	74.0%	81.5%	78.4%

注) 稼働率は「稼働日数/利用対象日数」、利用対象日数は保守点検日を除いたもの

2. 事業費の内訳と収支

次に、北九州芸術劇場の事業費の財源内訳と収支について、過去6ケ年と同様の分析を行った。

(1) 事業費の財源と事業支出の内訳

- 北九州芸術劇場の09年度の事業費は約3億1,000万円と、07年度以降の事業費の規模は連続して小さくなっている。
- 財源内訳をみると、チケット収入が約2億200万円と全体の65.2%、市の補助金が約8,300万円と26.9%、文化庁と(財)地域創造からの外部資金が約2,400万円と7.9%と、チケット収入と外部資金で事業費の約4分の3(73.1%)をカバーしている(図表1-7)。
- 09年度は、自主事業のチケット収入が、開館以来最も高い割合となった(図表1-8)。全国平均の試算値[※]と比較すると、09年度のチケット収入の割合は平均を大きく上回っている。チケット収入は、07年度:52.4%、08年度:42.2%、09年度:65.2%と継続して高い割合を占めており、劇場の営業努力がうかがえる。

※(財)地域創造の悉皆調査結果(2007年)から、指定管理施設の事業費の財源内訳の平均金額を試算すると、「設置者からの補助金・委託費」が52.7%、「事業収入」が36.6%、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付

金」が10.7%である。

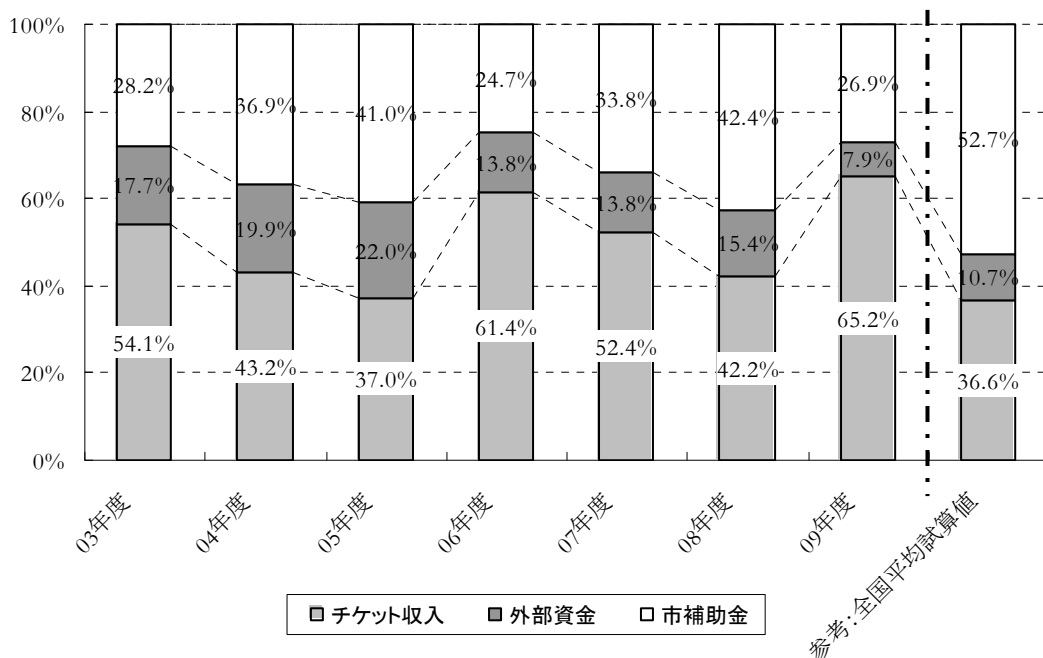
※指定管理施設の平成18年度決算金額平均値の「収入」欄から、「事業補助金」、「事業委託費」（いずれも設置者からの収入）、「事業収入」、「設置者以外からの助成金・協賛金・寄付金」の4項目を事業費財源と設定し、それぞれの内訳比率を算出した。

図表1-7 事業費の財源内訳(03年度～09年度)

	2003年度		2004年度		2005年度		2006年度	
	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳
チケット収入	215,389	54.1%	145,429	43.2%	110,060	37.0%	263,901	61.4%
市補助金	112,225	28.2%	124,198	36.9%	121,965	41.0%	106,363	24.7%
外部資金	70,700	17.7%	67,000	19.9%	65,295	22.0%	59,517	13.8%
文化庁	49,000	(12.3%)	49,000	(14.6%)	45,795	15.4%	45,800	10.7%
地域創造	10,000	(2.5%)	18,000	(5.3%)	19,500	6.6%	13,717	3.2%
日本財団	11,700	(2.9%)	—	—	—	—	—	—
計	398,314	100.0%	336,627	100.0%	297,320	100.0%	429,781	100.0%

	2007年度		2008年度		2009年度	
	金額	内訳	金額	内訳	金額	内訳
チケット収入	197,355	52.4%	135,979	42.2%	202,004	65.2%
市補助金	127,456	33.8%	136,854	42.4%	83,331	26.9%
外部資金	52,051	13.8%	49,579	15.4%	24,432	7.9%
文化庁	36,600	(9.7%)	27,400	(8.5%)	18,000	(5.8%)
地域創造	15,451	(4.1%)	22,179	(6.9%)	6,432	(2.1%)
日本財団	—	—	—	—	—	—
計	376,862	100.0%	322,412	100.0%	309,767	100.0%

図表1-8 事業費の比率(03年度～09年度)



(2) 事業収支

- 09年度の文化振興特別会計について、収入の部の決算報告をみると、予算額と決算額の差異は事業収入で約4,400万円の増収、補助金等収入は約8,800万円の減収となっており、09年度は補助金等の減収分を、事業収入によってカバーした形になった。
- 劇場の運営、事業の実施にあたって、経費節減の努力を行っていることとともに、積極的な営業努力を行なっていることがうかがえる。

図表1-9 事業収入、補助金等収入の予算額・決算額(03年度～09年度)

	2003年度			2004年度			2005年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	194,300	215,389	△ 21,089	146,346	145,429	917	130,500	110,060	20,440
下段:全体に占める割合	48.6%	54.1%	—	41.1%	43.2%	—	37.3%	37.0%	—
補助金等収入	205,700	182,925	22,775	209,300	191,198	18,102	219,500	187,260	32,240
	51.4%	45.9%	—	58.9%	56.8%	—	62.7%	63.0%	—
市補助金	135,000	112,225	22,775	135,000	124,198	10,802	151,000	121,965	29,035
助成金	70,700	70,700	0	74,300	67,000	7,300	68,500	65,295	3,205

	2006年度			2007年度			2008年度		
	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異	予算額	決算額	差異
事業収入	265,709	263,901	1,808	212,173	197,355	14,818	269,172	135,979	133,193
	53.9%	61.4%	—	50.2%	52.4%	—	54.1%	42.2%	—
補助金等収入	227,531	165,880	61,651	210,800	179,507	31,293	228,412	186,433	41,979
	46.1%	38.6%	—	49.8%	47.6%	—	45.9%	57.8%	—
市補助金	145,000	106,363	38,637	149,000	127,456	21,544	149,000	136,854	12,146
助成金	82,531	59,517	23,014	61,800	52,051	9,749	79,412	49,579	29,833

	2009年度		
	予算額	決算額	差異
事業収入	157,949	202,004	△ 44,055
	44.7%	65.2%	—
補助金等収入	195,470	107,763	87,707
	55.3%	34.8%	—
市補助金	135,000	83,331	51,669
助成金	60,470	24,432	36,038

第2章 観客の特性と観客からみた評価

本章では、開館以来継続的に実施している、主催事業および提携・協力事業の公演に会場した観客に対するアンケート調査の結果から、2009年度の観客の特性や、観客からみた北九州芸術劇場に対する評価を整理、分析した。

1. 観客調査の実施要領

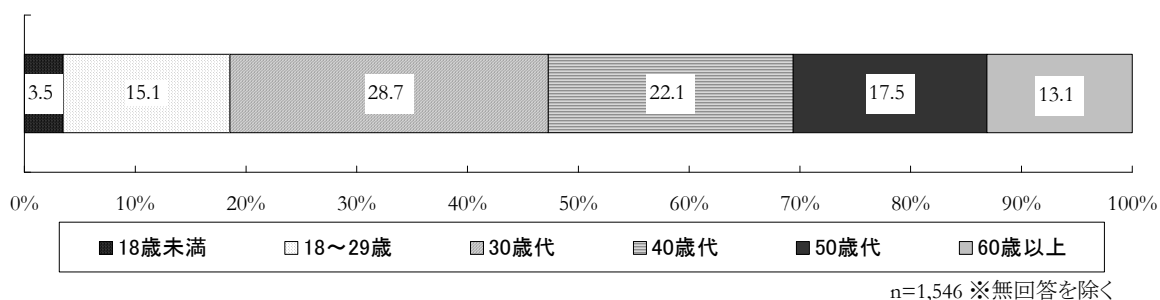
- 調査の対象:09年度に実施した主催事業および提携・協力事業公演 28公演
- 配布・回収方法:各公演初日の開演時に配布、終演時に回収
- 実施時期:09年5月30日～10年3月5日
- 有効回答数(回収率):1,692件、回収率:16.1% (配布数:10,525件)。

2. 観客調査の結果概要

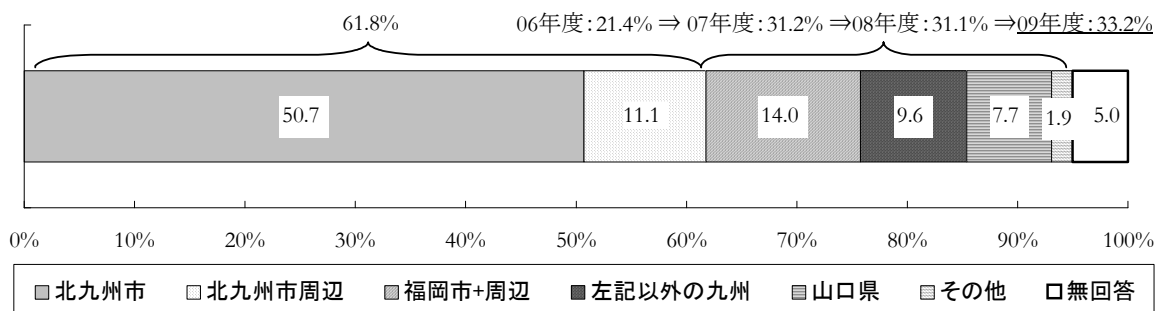
(1)観客(アンケート回答者)の属性 (p.資-10～19)

- 観客は、女性が83.4%、男性が16.6%と女性が多い。ジャンルによって若干男女比は異なり、「小劇場・現代演劇」、「音楽劇」、「ダンス・現代舞踊」では全体に比べて男性の割合が高い傾向がある。
- 平均年齢は42.0歳。年齢層に大きな偏りはなく、幅広い年齢層が来場している(図表2-1)。この傾向は、開館当初からの特徴である(平均年齢は、03年度:46歳、04年～08年度:42～43歳)。
- ジャンルによって年齢構成は異なり、「古典芸能」で年齢層が高い(平均年齢:56.0歳)。
- 居住地は、北九州市周辺を含めた市域からの来場者が61.8%(うち北九州市内が50.7%)である。福岡市域や福岡県以外の九州各県、山口県、その他からの09年度の来場者は33.2%で、07年度以降は約3割を占めている(図表2-2)。

図表2-1 年齢層(09年度)



図表2-2 居住地(09年度)



- チケットクラブには回答者の約2割(22.5%)が入会している。入会していない場合、今後入会意向があるのは17.4%である。

(2) 北九州芸術劇場での公演鑑賞の状況

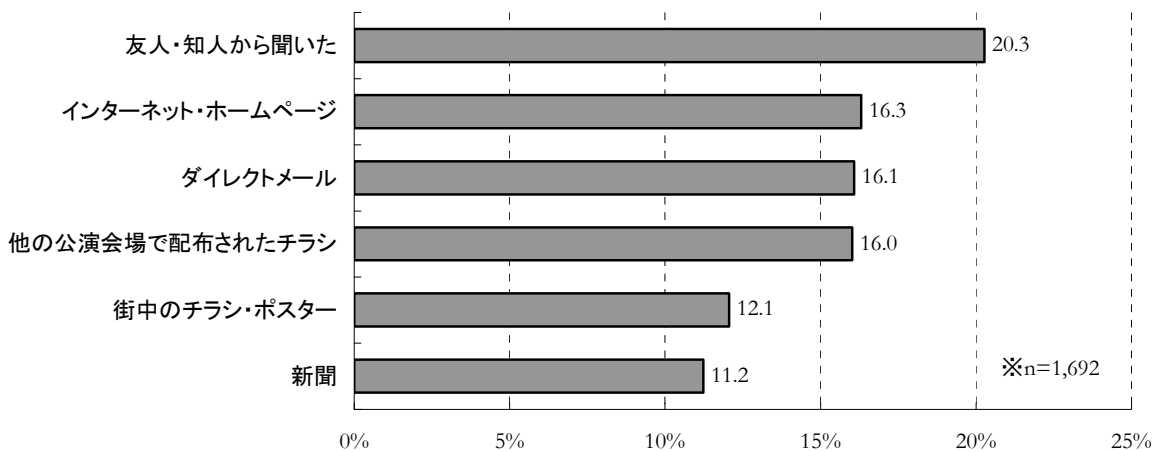
①来場公演のジャンル(p.資-22~23)

- 回答者が来場した公演のジャンルは、「小劇場・現代演劇」が約7割(70.3%)を占める。
※アンケート配布公演28公演のうち22公演が「小劇場・現代演劇」であることによる。
- 年齢別に来場公演のジャンルをみると、他の年齢層に比べて、18歳未満では「音楽劇」の割合が高い。18~40歳代は「小劇場・現代演劇」、50歳代は「ミュージカル・商業演劇」の割合が高い。また、60歳以上は「古典芸能」の割合が顕著に高い。
- 劇場での鑑賞経験が多いほど、「小劇場・現代演劇」を鑑賞している割合が高い。

②公演情報の入手経路(p.資-24~25)

- 公演情報の入手経路は、全体では「友人・知人から聞いた」(20.3%)の割合が最も高く、次いで、「インターネット・ホームページ」(16.3%)、「ダイレクトメール」(16.1%)、「他の公演会場で配布されたチラシ」(16.0%)がほぼ同割合となっている(図表2-3)。「ダイレクトメール」や「他の公演会場で配布されたチラシ」への回答が多いのは、回答者に「小劇場・現代演劇」の鑑賞者が多いことが影響していると思われる。
- 開館年度から継続して「友人・知人から聞いた」への回答割合が最も高く、口コミが重要な情報源であることがうかがえる。

図表2-3 公演情報の入手経路(09年度) ※10%以上回答があった項目を、回答の多い順に掲載



- 公演情報の入手経路を、年齢別、北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、年齢別では、29歳以下と50歳代では「友人・知人から聞いた」(50歳代は「ダイレクトメール」も同率)、30歳代では「インターネット・ホームページ」、40歳代・50歳代では「ダイレクトメール」、60歳代以上では「新聞」の割合が最も高い。
- 「インターネット・ホームページ」は、18歳以上~40歳代で利用割合が高く、若い世代ではインターネット・ホームページが重要な情報入手経路となっていることがうかがえる。一方「新聞」は年齢層が高いほど割合が高い(図表2-4)。
- また、北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、鑑賞経験が多いほど「ダイレクトメール」と「他の公演会場で配布されたチラシ」への回答割合が高く、その傾向は顕著である。一方、鑑賞経験が少ないほど「友人・知人から聞いた」の割合が高くなっている。
- 鑑賞経験によって情報の入手経路には特徴があるが、「インターネット・ホームページ」につ

いては、鑑賞経験に関わらず15～19%が利用する情報入手ツールとなっている。

図表2-4 年齢別、北九州芸術劇場での鑑賞経験別 公演情報の入手経路(09年度)

n=1,692(単位:%)

		友人・知人から聞いた	インターネット・ホームページ	ダイレクトメール	他の公演会場で配布されたチラシ	街中のチラシ・ポスター	新聞
全体		20.3	16.3	16.1	16.0	12.1	11.2
年齢層	18歳未満	31.5	3.7	5.6	5.6	7.4	5.6
	18～29歳	26.2	22.3	8.6	17.6	18.0	4.7
	30歳代	19.8	22.3	15.8	19.8	11.3	7.7
	40歳代	14.0	19.3	20.5	18.1	12.3	10.2
	50歳代	24.8	10.7	24.8	12.2	11.1	14.8
	60歳以上	18.2	4.4	12.8	11.3	8.9	25.1
鑑賞経験	今日が初めて	25.3	18.5	2.7	8.4	9.5	13.9
	1～2回	31.8	16.5	5.1	7.5	11.4	8.6
	3～5回	19.9	16.9	13.2	15.4	13.6	10.7
	6～10回	16.2	16.2	23.1	18.5	12.3	9.6
	11回以上	9.4	15.1	41.5	33.4	14.0	13.7

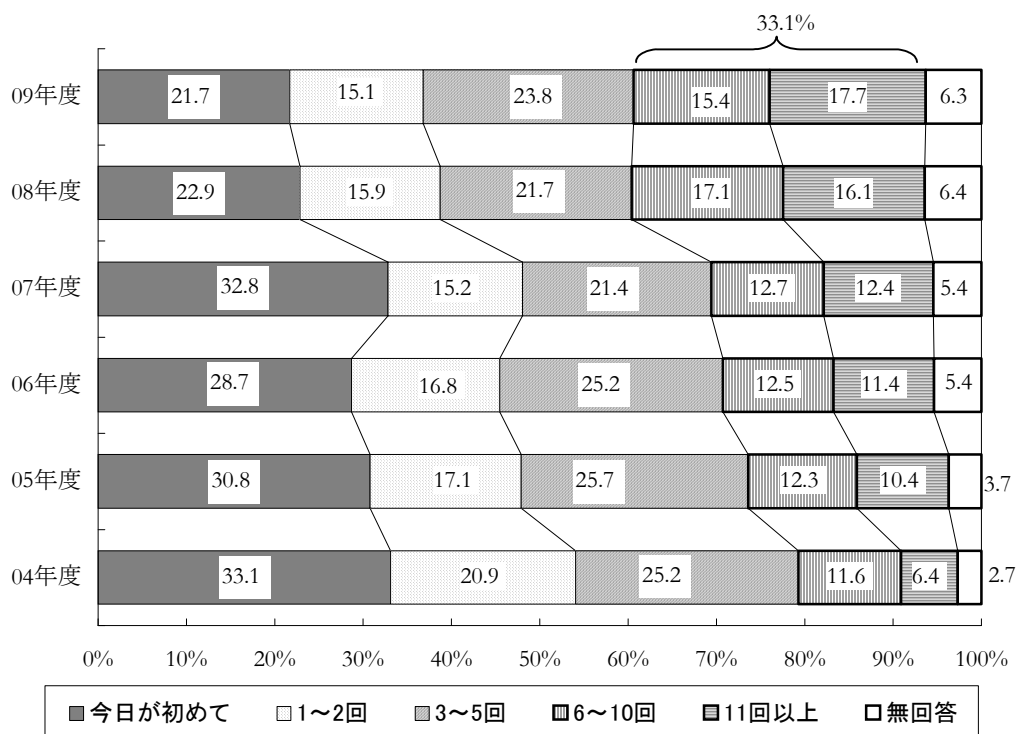
③公演に来た理由(p.資-26～27)

- 公演に来た理由は、「出演者等が好きだから」(56.4%)、「公演内容が面白そうだったから」(47.5%)への回答が多い。音楽劇では、「出演者や関係者が知り合いだから」への回答が多い(62.9%)。

④北九州芸術劇場での鑑賞経験(p.資-46～47)

- 北九州芸術劇場での鑑賞経験は「年3～5回」(23.8%)の割合が最も高いが、「今日が初めて」から「年11回以上」まで大差はなく、来場者の鑑賞経験は幅広い。

図表2-5 北九州芸術劇場での鑑賞経験 (04年度～09年度)



- 観客の北九州芸術劇場での鑑賞経験が多様であるのは04年度調査からの特徴であるが、年々劇場での鑑賞経験の多い観客(来場経験が6回以上)が増えている(図表2-5)。6回以上の鑑賞経験者の割合が高いのは、ジャンル別では「小劇場・現代演劇」、年齢別では「40歳代」と「50歳代」である。

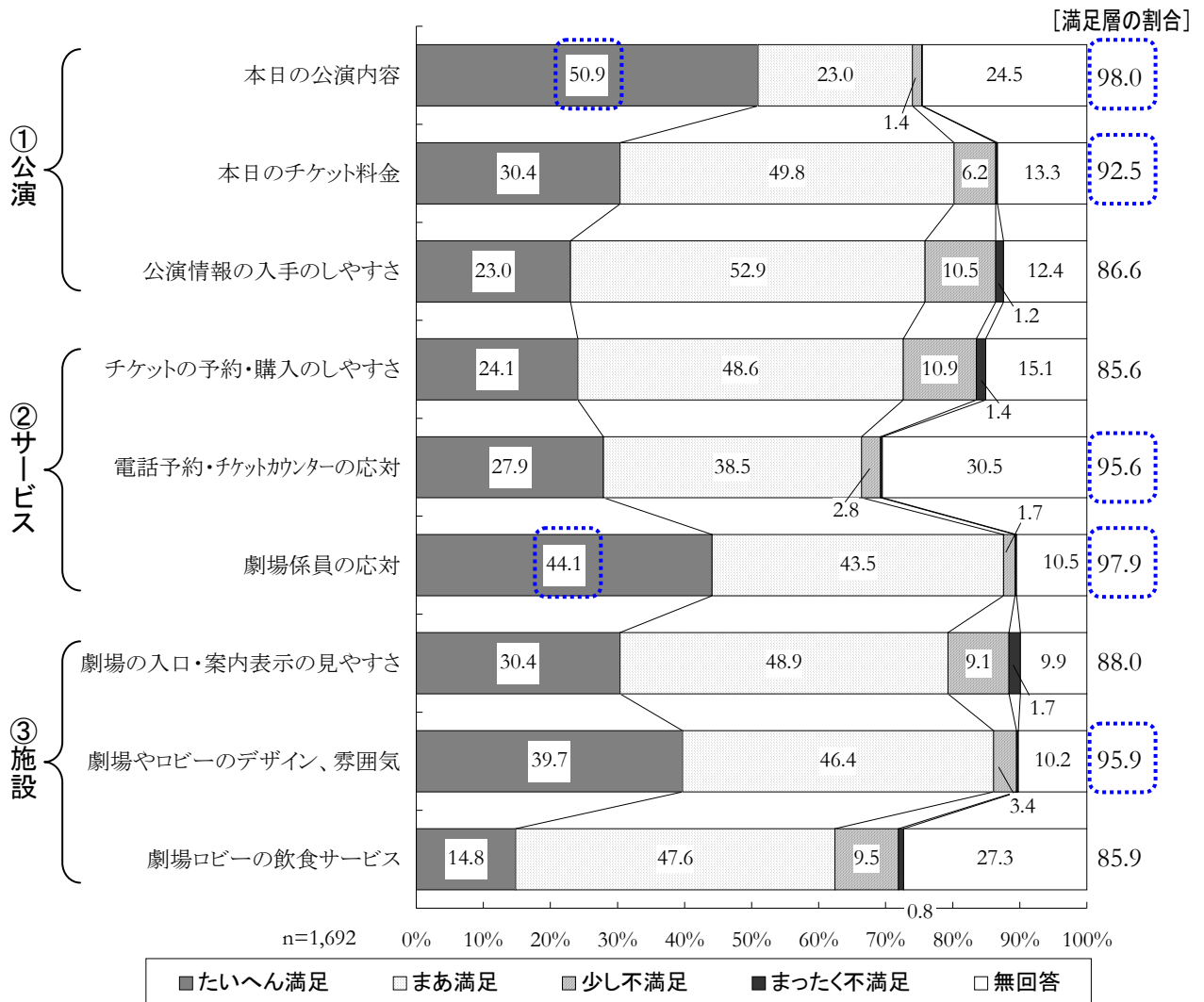
⑤公演前後の飲食やショッピング(p.資-28~29)

- 来場者の58.9%が公演前後に飲食あるいはショッピングをしており、平均金額は、飲食の場合が約1,500円(飲食をしている回答者の割合:全体の48.5%)、ショッピングの場合が約4,600円(ショッピングをしている回答者の割合:全体の26.5%)である。

(3) 公演や劇場に対する満足度(p.資-30~38)

- 満足層の割合(「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く)が90%以上を占めるのは、「本日の公演内容」、「本日の公演のチケット料金」、「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場係員の応対」、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」の5項目である(図表2-6)。

図表2-6 公演や劇場に対する満足度(09年度)



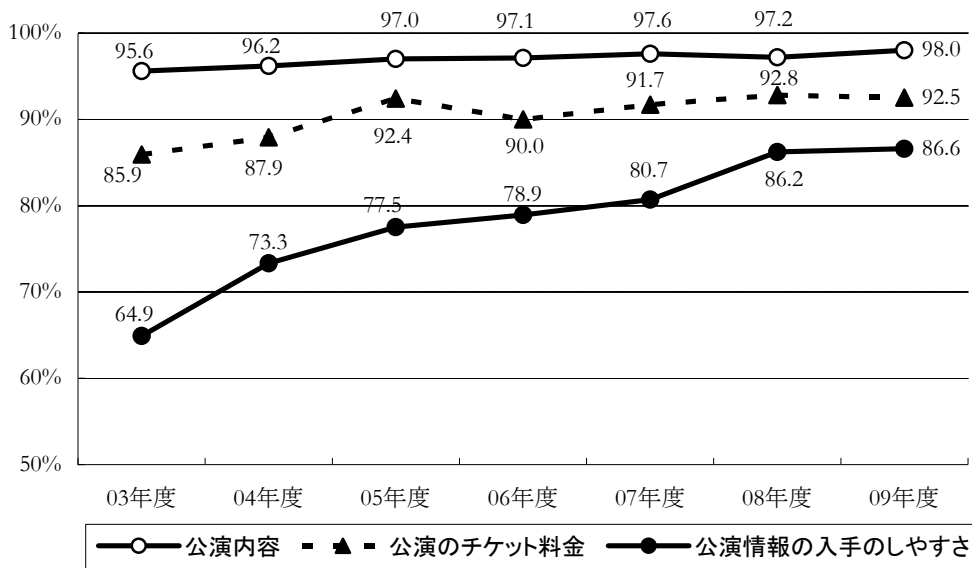
※満足層の割合:「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。

- 特に、「本日の公演内容」、「劇場係員の応対」の2項目については、「たいへん満足」の割合も、それぞれ50.9%、44.1%と高い評価となっている。
- 年齢別にみると、いずれの項目も年齢層が高くなるほど満足度は低くなる傾向がある。60歳代以上では、ほぼすべての項目で「たいへん満足」の割合が低い。特に情報入手や、劇場のハード面に関する項目でその傾向は顕著である。
- 無回答が多い「電話予約・チケットカウンターの応対」、「劇場ロビーの飲食サービス」については、利用したことがない人が多いと考えられる。
- 次に、満足度に関する9項目を、①公演、②サービス、③施設の3つに分けて、満足層の割合の経年変化でみてみよう(図表2-7～2-9)。

①公演について(図表2-7)

- 「公演内容」については、03年度から継続して満足層の割合が顕著に高く、観客からの評価は極めて高い。
- 「公演のチケット料金」も05年度以降、90%以上の高い満足度を維持している。「公演内容」への満足度の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも大きく関わっていると考えられる。
- 開館当初満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、年々満足度が向上し、09年度は満足層の割合が86.6%となっている。

図表2-7 公演関連項目に関する満足層の割合(03年度～09年度)

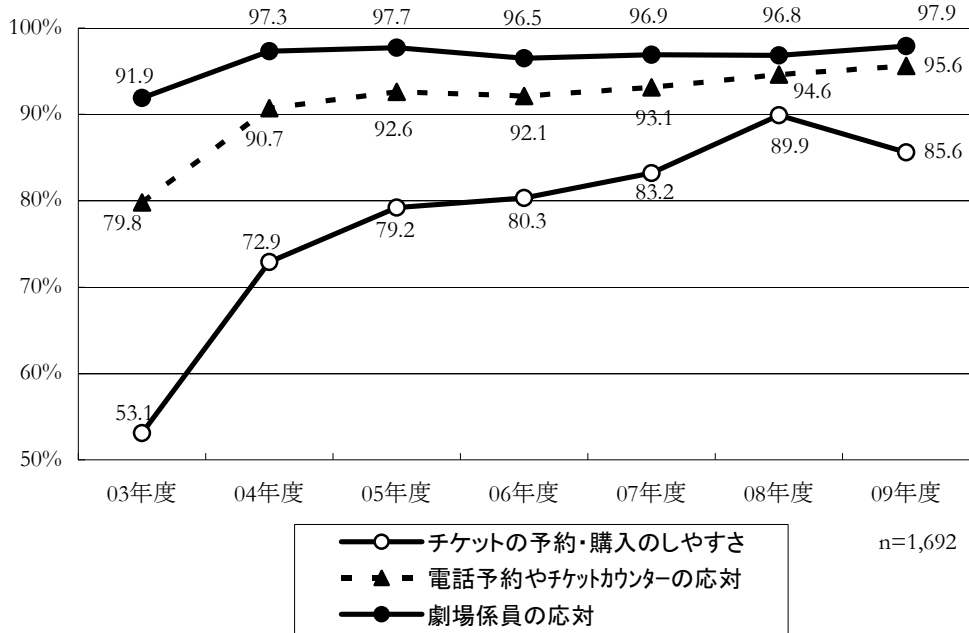


n=1,692

②サービスについて(図表2-8)

- 「劇場係員の応対」、「電話予約やチケットカウンターの応対」は、04年度に満足層の割合が90%を超え、そのまま高い満足度を維持している。
- 開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、満足度の伸びが大きい。09年度は85.6%と若干数字は下がっているが、「たいへん満足」の割合も24.1%とほぼ08年度(25.9%)と同じ割合を維持している(人気公演の場合は、チケットの予約・購入がしにくくなることに留意が必要である)。

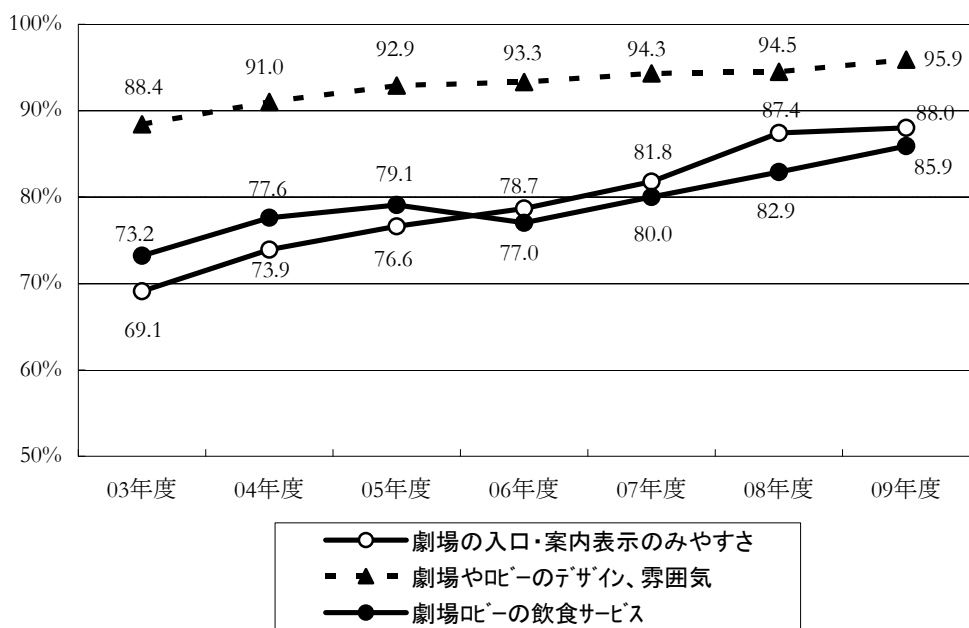
図表2-8 サービス関連項目に関する満足層の割合(03年度～09年度)



③施設について(図表2-9)

- 施設に関わる3項目のうち、「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は、開館当初から満足層の割合が高く、そのまま高い水準を維持している。
- 一方、「劇場の入口・案内表示のみやすさ」は、複合施設である故の動線の複雑さもあり、開館当初は満足層の割合が他の項目に比べて低かったが、年々満足度が高まっており、09年度は88.0%まで向上している。これは、観客が慣れてきたこともあるが、案内表示の増設や既存サイン文字の大型化、駐車場エレベーター入口での音声案内など劇場側の工夫や努力の成果が大きいといえよう。

図表2-9 施設関連項目に関する満足層の割合(03年度～09年度)

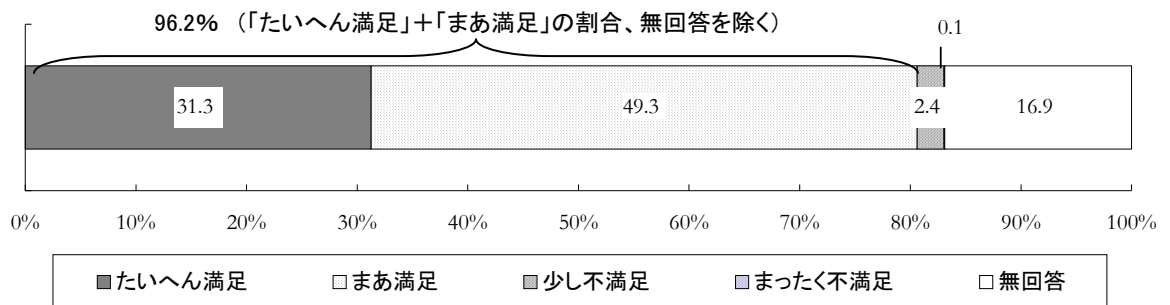


- ①公演、②サービス、③施設、いずれについても、すでに満足度が高い項目は高さを堅持し、満足度が低かった項目は年々改善している。

④総合的な満足度について

- 劇場に関する総合的な満足度は、満足層の割合が96.2%。「たいへん満足」の割合が31.3%、「まあ満足」の割合が49.3%となっている(図表2-10)。

図表2-10 総合的な満足度(09年度)



(4) 劇場の運営方針について(p.資-39~41)

- 北九州芸術劇場の基本方針の「観る」、「創る」、「育つ」については、いずれも90%以上が賛同している(「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く)(図表2-11)。
- 「観る」については、「ぜひやってほしい」が80.4%と高い割合となっている(本アンケートが鑑賞者を対象としたアンケートであることには留意が必要である)。「創る」、「育つ」については、「観る」と比べると低いとはいえ、「ぜひやってほしい」が約50%と半数近くを占める。これは03年度からの傾向である。
- 「創る」、「育つ」ともに、29歳未満の若い世代で「ぜひやってほしい」と積極的に賛同する割合が高い。

図表2-11 運営方針への賛同度(09年度)

n=1,692

運営方針	ぜひやってほしい	まあやってほしい	あまりやる必要はない	まったくやる必要はない	無回答	賛同する人の割合	賛同しない人の割合
観る	80.4%	12.5%	0.5%	0.1%	6.5%	99.4%	0.6%
創る	50.1%	36.8%	3.7%	0.3%	9.1%	95.6%	4.4%
育つ	47.8%	37.3%	5.1%	0.6%	9.2%	93.7%	6.3%

※賛同する人の割合:「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。

(5) 日頃の鑑賞活動について

①日頃コンサートや演劇に出かける頻度(p.資-44~45)

- 日頃コンサートや演劇に出かける頻度は、「年に3~4回」(22.4%)、「年に1~2回」(22.1%)、「年に5~9回」(16.0%)となっており、日頃の舞台芸術の鑑賞頻度は多様である。
- 北九州芸術劇場の鑑賞経験が多いほど、日頃の鑑賞経験も多い。一方、北九州芸術劇場での鑑賞は初めてでも、日頃月1回以上コンサートや演劇に出かける人も約1割(11.1%)となっている。

②興味のあるジャンル(p.資-48～50)

- 普段興味を持っているジャンルについては、「映画」(53.7%)、「小劇場・現代演劇」(51.5%)、「ミュージカル・宝塚歌劇」(49.3%)、「有名俳優の演劇」(48.9%)への回答割合が高く、興味のあるジャンルは多様である。
- 興味のあるジャンルは、性別や年齢で特徴がある。性別で見ると、男性は「映画」、「寄席・演芸・お笑い・独演会等」、女性は「ミュージカル・宝塚歌劇」、「有名俳優の演劇」への回答割合が高い。
- 年齢別で見ると、30歳代以下では「映画」、「小劇場・現代演劇」、50歳代・60歳代以上では「有名俳優の演劇」、「寄席・演芸・お笑い・独演会等」、「能・狂言・文楽・歌舞伎等」への回答割合が他の年齢層に比べて高い。
- 北九州芸術劇場での鑑賞経験別にみると、「小劇場・現代演劇」、「有名俳優の演劇」、「ミュージカル・宝塚歌劇」への興味は高い。また、「ポップス・ロック」、「映画」以外のほとんどすべての項目について回答割合が高く、劇場での鑑賞経験が多い人は、さまざまな文化・芸術に興味を持っていることがうかがえる。

第3章 貸館利用者からみた評価

1. 利用者調査の実施要領

- 調査の対象:2009年度の貸館利用者(団体)
- 配布・回収方法:利用当日に配布、回収(後日ファックス、郵送での回収も受付)
- 配布件数:233件
- 有効回答数(回収率):149件(63.9%)

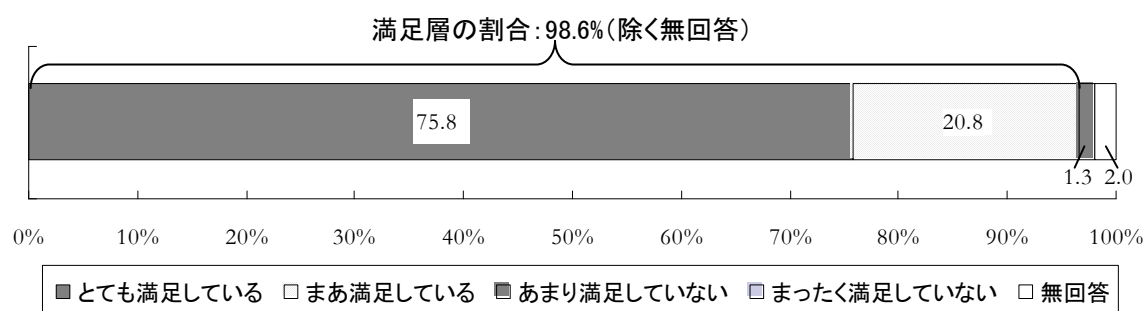
2. 利用者調査の結果概要

※本調査は、統計的な分析を目的とした調査ではなく、有効回答数も少ないため、アンケート結果の記述にあたっては、割合(%)とともに回答数を併記している。

(1) 劇場の使いごちに関する総合的な満足度(p.資-63)

- 劇場の使いごちに関する総合的な満足度は、「とても満足」が75.8%(113件)、「まあ満足」が20.8%(31件)で、満足層の割合(「とても満足」+「まあ満足」と回答した割合、無回答を除く)は98.6%と大変高い。

図表3-1 総合的な満足度【09年度】



(2) 施設に関する意見(p.資-64~68)

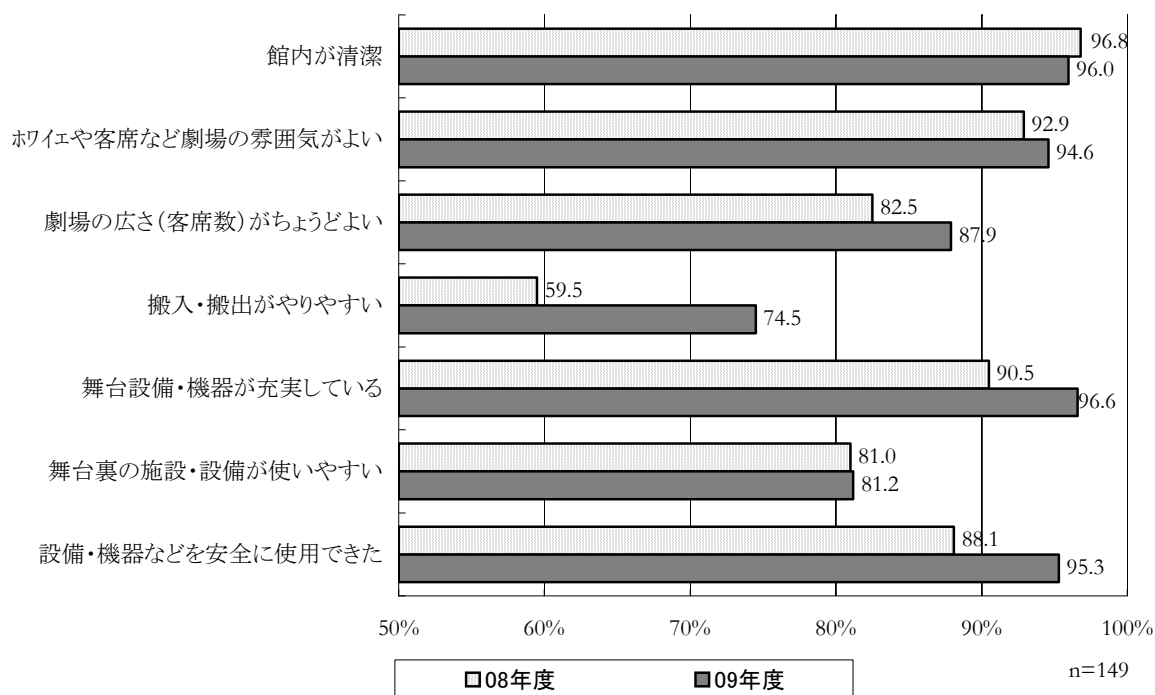
- 施設に関する7項目については、「搬入・搬出がやりやすい」以外の6項目で、肯定的な評価をしている割合(「はい」+「どちらかといえば『はい』」、無回答を除く)は95%以上と大変高い。また、「はい」という積極的な評価の割合も高く、特に「館内が清潔」、「ホワイエや客席などの雰囲気がい」、「舞台設備・機器が充実している」、「設備・機器などを安全に使用できた」の4項目は、「はい」が90%以上である(図表3-2)。
 - 「はい」という積極的な評価の割合について、アンケートを開始した05年度からの経年変化をみると、ほとんどの項目で06年度に大きく向上し、その後も評価が向上している。
 - 09年度も、08年度と比べて多くの項目で「はい」への回答が増加している。「搬入・搬出がやりやすかった」については、他の項目に比べて満足層の割合、「はい」への回答ともに少ないものの、満足層の割合は91.8%となっている。また、「はい」への回答割合は08年度に比べて大きく増加しており、利用者への搬入・搬出に関する説明や案内が周知されてきていること、利用者が慣れてきていることがうかがえる(図表3-3)。
- ※搬入・搬出については、複合施設である故の制限、駐車場からの動線の難しさ等が、意

見記述欄にも課題として記入されることが多いが、打合せ時に説明・案内を周知する、施設側(リバーウォーク北九州)と協議・調整する等の対策を講じている。

図表3-2 施設(ハード)に関する意見【09年度】

	「はい」	どちらか といえば 「はい」	どちらか といえば 「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」+ どちらかとい えは「はい」(除無 回答)
n=149(単位:%)						
館内が清潔	96.0	4.0	0.0	0.0	0.0	100.0
ホワイヤや客席など劇場の雰囲気がい	94.6	4.7	0.7	0.0	0.0	99.3
劇場の広さ(客席数)がちょうどよい	87.9	10.7	0.7	0.7	0.0	98.7
搬入・搬出がしやすい	74.5	15.4	6.0	2.0	2.0	91.8
舞台設備・機器が充実している	96.6	2.0	0.7	0.0	0.7	99.3
舞台裏の施設・設備が使いやすい	81.2	14.8	2.7	0.0	1.3	97.3
設備・機器などを安全に使用できた	95.3	4.7	0.0	0.0	0.0	100.0

図表3-3 施設(ハード)に関する意見「はい」の回答割合比較【08年度・09年度】



(3) 運営や応対に関する意見(p.資-69~73)

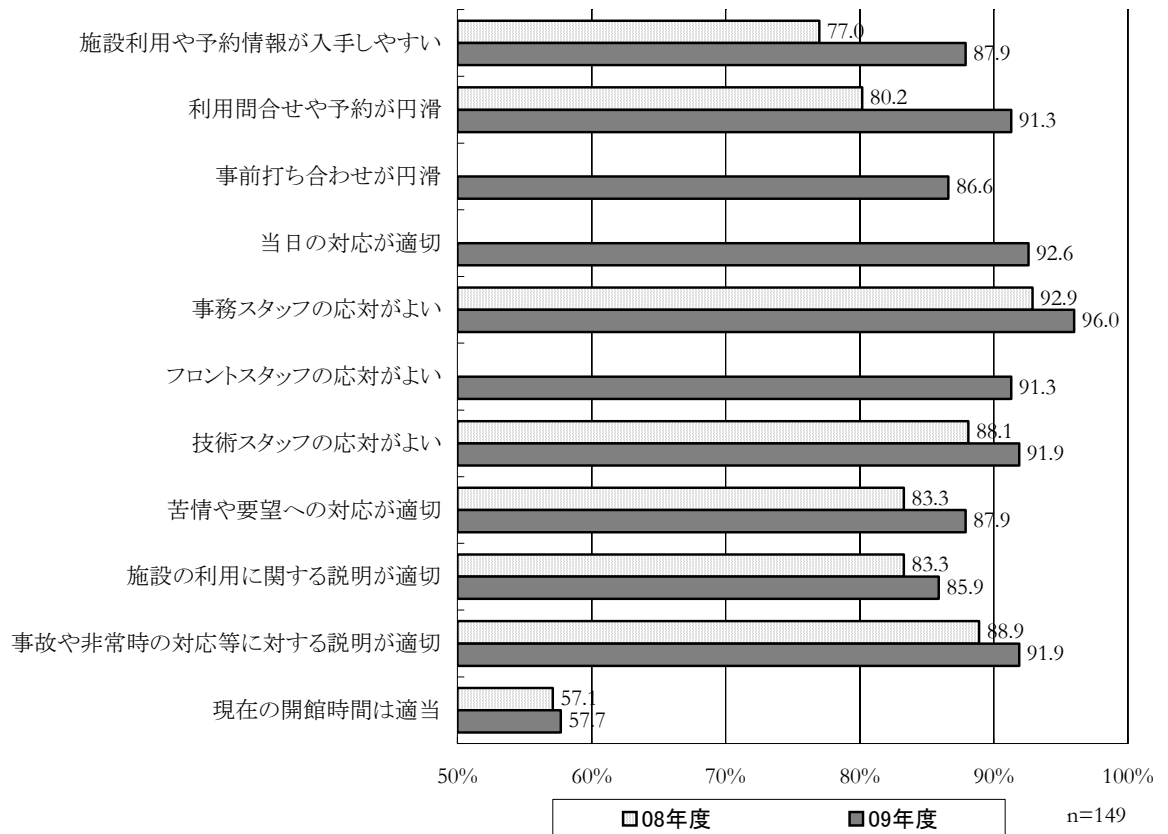
- 運営、応対に関する11項目についても、「現在の開館時間は適当」以外の10項目で、肯定的な評価をしている割合が95%以上と高くなっている。また、「はい」という積極的に評価する割合も高い(図表3-4)。
- 「はい」という積極的な評価の割合については、(2)施設(ハード)に関する意見と同様、ほとんどの項目で06年度に大きく向上している。09年度は、08年度と比べて、すべての項目で「はい」への回答割合が高くなっており(図表3-5)、劇場スタッフの努力がうかがえる結果となっている。

- 「開館時間は適当である」については、他の項目に比べると「はい」の割合が低い。これは管理規則で10時から22時と定められていることによるが、自由回答でもより長い開館時間を求める意見や、仕込み等のために柔軟な利用時間の設定を求める意見があがっている。

図表3-4 運営や対応(ソフト)に関する意見【09年度】

n=149(単位:%)	「はい」	どちらか といえ ば「はい」	どちらか といえ ば「いいえ」	「いいえ」	無回答	「はい」+ どちらかといえ ば「はい」(除無 回答)
施設利用や予約情報が入手しやすい	87.9	11.4	0.7	0.0	0.0	99.3
利用問合せや予約が円滑	91.3	6.7	0.7	0.0	1.3	99.3
事前打ち合わせが円滑	86.6	8.7	3.4	0.0	1.3	96.6
当日の対応が適切	92.6	6.7	0.0	0.0	0.7	100.0
事務スタッフの対応がよい	96.0	3.4	0.7	0.0	0.0	99.3
フロントスタッフの対応がよい	91.3	5.4	1.3	0.0	2.0	98.6
技術スタッフの対応がよい	91.9	7.4	0.0	0.0	0.7	100.0
苦情や要望への対応が適切	87.9	9.4	0.7	0.0	2.0	99.3
施設の利用に関する説明が適切	85.9	11.4	1.3	0.0	1.3	98.6
事故や非常時の対応等に対する説明が適切	91.9	7.4	0.0	0.0	0.7	100.0
現在の開館時間は適当	57.7	24.8	10.7	4.7	2.0	84.2

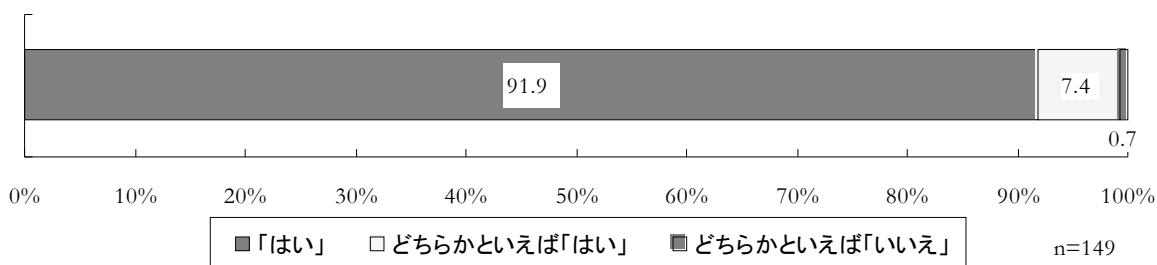
図表3-5 運営や対応(ソフト)に関する意見「はい」の回答割合比較【08年度・09年度】



(4) 今後の利用の意向 (p.資-74)

- 「機会があればまた利用したい」については、「はい」が91.9% (137件)と高い割合を占めており、「どちらかといえば『いいえ』」は1件、「いいえ」は0件であった。利用者の今後の利用意向は大変高い。
- 今後の利用意向への高さは、貸館事業全体への満足度の高さを示しているものであると考えられる。

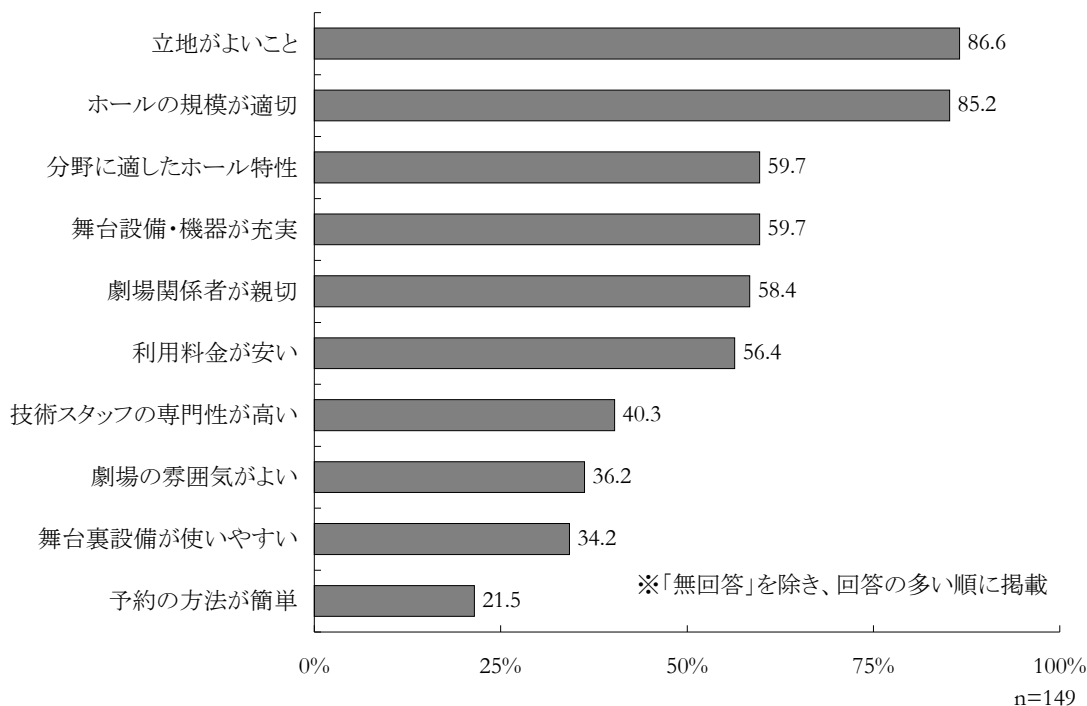
図表3-6 今後の利用の意向【09年度】



(5) 利用の際、重視すること (p.資-75~77)

- 利用の際重視することとしては、「立地がよいこと」(86.6%・129件)と「ホール規模が適切」(85.2%・127件)への回答が多い。
- そのほか、「分野に適したホール特性」、「舞台設備・機器が充実」、「劇場関係者が親切」、「利用料金が安い」も50%以上の回答となっている。

図表3-7 利用の際、重視すること【09年度】

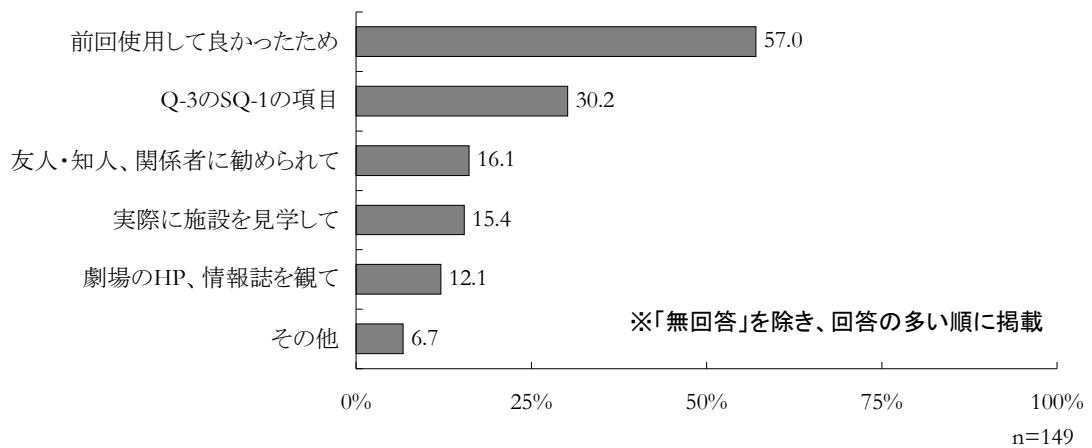


- 最も重視することは、「ホール規模が適切」(34.2%・51件)への回答が最も多く、次いで、「立地がよいこと」(25.5%・38件)、「分野に適したホール特性」(22.8%・34件)となっている。

(6) 利用のきっかけ(p.資-78)

- 利用のきっかけは、「前回使用して良かったため」への回答が最も多く、57.0%(85件)を占めている。利用者の劇場への満足度は高く、そのため、リピーターの利用が多いことがうかがえる。
- 次いで、「Q-3のSQ-1(利用の際、重視する)の項目」(30.2%・45件)となっており、「立地がよいこと」、「ホールの規模が適切」といった上位項目が劇場利用のきっかけになっていると考えられる。

図表3-8 利用のきっかけ



第4章 経済波及効果とパブリシティ効果

劇場の運営は、様々な経済効果を生み出し、地域の活性化を促すと言われている。ここでは、昨年度調査と同様、経済波及効果について、産業連関表を用いた分析を行うとともに、パブリシティ効果について、その概要と金額換算による規模の把握を行った。

1. 経済波及効果

劇場の運営にともなう経済波及効果には、劇場および観客の支出からなる最終需要(直接的経済効果)、それに伴う生産増、そしてそれらがもたらす所得増、雇用増、税収増などが考えられる。

09年度も例年どおり、産業連関表に基づいた経済波及効果に加え、雇用効果を試算した。

(1) 北九州芸術劇場の経済波及効果の基本構造と分析方法

- 経済波及効果をもたらす支出(最終需要)は、
 - ①劇場の管理運営に関する支出
 - ②劇場の主催事業に関する支出
 - ③劇場の主催事業の観客の消費支出
 - ④貸館事業の主催者の事業支出
 - ⑤貸館事業の観客の消費支出の5つに分類することができる(図表4-1参照)。
- 今回の調査では、①、②については劇場の運営データに基づいて、③については観客アンケートの調査結果に基づいて把握・推計を行った。
- ④については貸館事業者からのデータ提供が必要であるが、調査対象となっていないため、貸館事業の1公演あたりの支出を、主催事業1公演あたりの支出の20%もしくは30%と想定して、この二つのケースについて、支出額を試算した。
- また、主催事業の観客アンケート調査の結果をみると、北九州市内だけではなく、九州全域や他の地域からも幅広く観客を集めているのに対し、貸館の事業内容をみると、同じように幅広いエリアからの集客や、同じような消費活動を行っているとは考えにくいため、⑤については、③のデータを援用して試算した。
- したがって、④、⑤の計算結果については、あくまでも参考値である。
- また、これらの計算結果のうち、北九州市内の経済波及効果と福岡県の雇用表の就業係数、雇用係数を用いて、北九州芸術劇場がどのぐらいの雇用効果を有しているかを試算した。

(2) 分野別の最終需要と経済波及効果、雇用効果

- 上記①から⑤の分野別に見た最終需要と、産業連関表を使った経済波及効果の計算結果は、図表4-1に示したとおりである。①劇場の管理運営、②劇場の主催事業、③主催事業の観客の消費支出にともなう最終需要の金額は、それぞれ6億7,100万円、3億900万円、1億8,100万円、合計で11億6,100万円となっている。そのうち、67.1%にあたる7億7,900万円が北九州市内での最終需要である。
- これら最終需要に伴う経済波及効果は、①が9億2,700万円、②が4億9,200万円、③が2億7,800万円、合計で16億9,800万円である。そのうち、61.4%にあたる10億9,800万円が北九州市内での経済波及効果である。生産誘発係数は、全体で1.46、北九州市内で1.34である。
- 参考値ではあるが、貸館の事業主催者の支出および貸館事業の観客の消費支出による経済波及効果(北九州市内のみ)は、7億7,600万円～9億100万円、生産誘発係数は1.34であ

る。

- それらをあわせた経済波及効果の総合計は、約24億7,300万円～25億9,800万円で生産誘発係数は1.42、北九州市内に限ってみると、約18億1,800万円～19億4,300万円で生産誘発係数は1.34となっている。
- また、これら経済波及効果の結果から試算した雇用効果は、就業者数(労働量)では137～145人、雇用者数(有給の役員・雇用者数、常勤・臨時含む)で117～125人で、商業、対個人サービス、対事業所サービスなどの分野を中心に雇用効果が現れている。

図表4-1 北九州芸術劇場の経済波及効果、雇用効果(09年度)

		最終需要	経済波及効果	誘発係数
管理運営・主催事業	①管理運営 事務局経費、委託費、光熱水費、その他	6億7,100万円 (5億8,800万円)	9億2,700万円 (7億8,700万円)	1.38 (1.34)
	②主催事業 出演料、創作スタッフ費、音楽費、製作費(交通費、宿泊費、食費、制作雑費)、宣伝費、記録費、予備費	3億900万円 (9,700万円)	4億9,200万円 (1億3,000万円)	1.59 (1.35)
	③主催事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費、宿泊費	1億8,100万円 (9,400万円)	2億7,800万円 (1億2,500万円)	1.54 (1.33)
	小計	11億6,100万円 (7億7,900万円)	16億9,800万円 (10億9,800万円)	1.46 (1.34)
貸館事業(参考値)	④貸館事業(貸館主催者の支出) 出演料、製作費、その他	1億8,800万円 ～2億8,200万円	2億5,000万円 ～3億7,400万円	1.33
	⑤貸館事業観客消費支出 飲食・買物費、交通費	3億9,200万円	5億2,600万円	1.34
	小計(参考値)	5億8,000万円 ～6億7,400万円	7億7,600万円 ～9億100万円	1.34
合計(参考値)		17億4,100万円 ～18億3,500万円 (13億5,900万円 ～14億5,300万円)	24億7,300万円 ～25億9,800万円 (18億1,800万円 ～19億4,300万円)	1.42 (1.34)
		雇用効果 (北九州市内)	137～145人(就業者ベース) 117～125人(雇用者ベース)	

注) 下段の括弧内の数字は、北九州市内の最終需要、経済波及効果。貸館事業については、最終需要、経済波及効果とも北九州市内のみと想定した試算結果である。また、各データは四捨五入した数字のため、小計、合計の数値が各データの合計と合わない箇所がある。

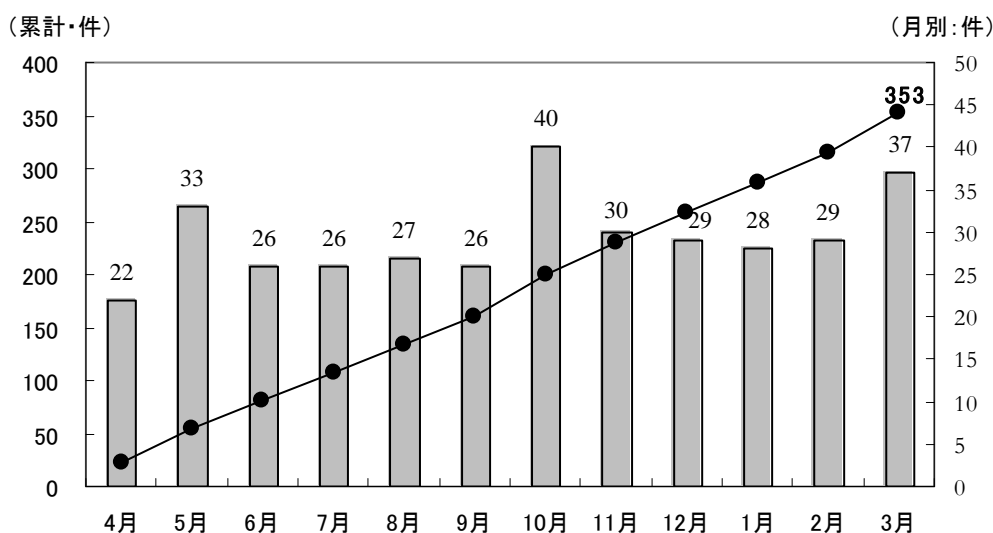
2. パブリシティ効果

文化的な催しや劇場運営においては、新聞や雑誌への記事掲載やテレビ報道などによって、地域の認知度向上やイメージアップが図られるケースが多く、それらは「パブリシティ効果」と呼ばれている。そして、その効果は、記事の大きさなどを基準にした広告宣伝費を目安にして、しばしば金額換算される。本事業評価調査では、03年度から新聞記事に焦点を当てたパブリシティ効果を算出しており、09年度も継続してパブリシティ効果の算出を行なった。

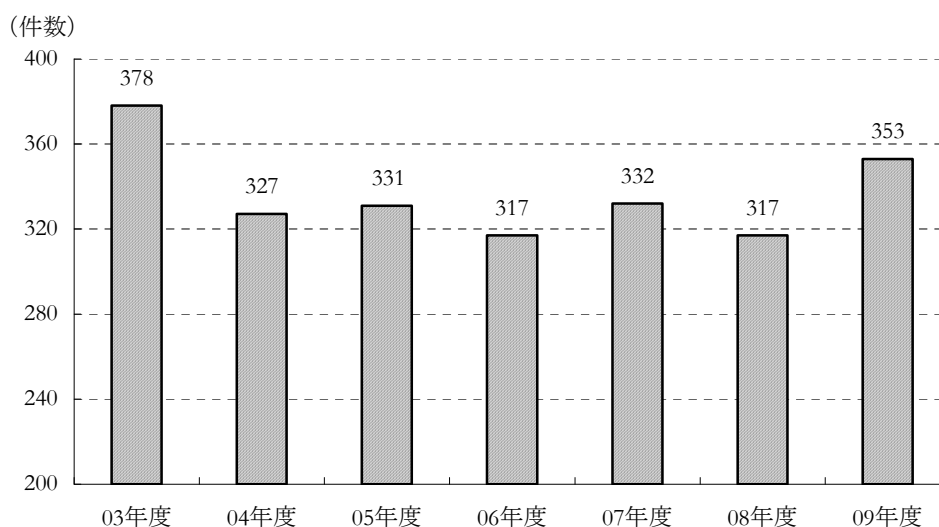
(1) 「北九州芸術劇場」をキーワードとした09年度の掲載記事の件数と内容

- 09年度についてみると、「北九州芸術劇場」をキーワードに検索された新聞記事の件数は353件(図表4-2)である。
- 03年度は開館年度ということで話題性が高く、掲載記事の件数も多かったが、04年度以降は、「北九州芸術劇場」を会場とするイベントや関連記事、北九州芸術劇場の事業に関する記事が毎月コンスタントに掲載されている(図表4-3)。

図表4-2 月ごとの掲載件数と累計(09年度)



図表4-3 年度ごとの新聞記事掲載件数の推移(03年度～09年度)



資料) 図表4-2、4-3ともに「日経テレコン」記事検索の結果より作成

- 新聞別に見ると、09年度で掲載が最も多いのは西日本新聞(131件)、次いで、朝日新聞(80件)、読売新聞(45件)、毎日新聞(43件)、日経新聞(34件)、その他(九州各県をはじめとする地方新聞、20件)となっている(図表4-4)。

図表4-4 新聞別件数一覧(03年度～09年度)

	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度
西日本新聞	151	147	149	149	120	119	131
朝日新聞	78	52	48	60	74	62	80
読売新聞	40	61	46	31	28	36	45
毎日新聞	58	31	34	20	32	33	43
日本経済新聞	34	32	37	37	50	41	34
その他	17	4	17	20	28	26	20
計	378	327	331	317	332	317	353

資料)「日経テレコン」記事検索の結果に基づく

- これら記事を、
 - ① 北九州芸術劇場の公演紹介・取材記事、劇評など
 - ② 北九州芸術劇場のPRキャンペーン、劇場主催事業の紹介記事
 - ③ 情報コーナーなどでの公演情報の提供等
 - ④ 芸術文化以外のイベント、講演の紹介記事(会場名が「北九州芸術劇場」)
 - ⑤ 情報コーナーなどでの芸術文化以外のイベントの情報提供(会場名が「北九州芸術劇場」)
 の5種類に分類し、北九州芸術劇場として記事性の高い①、②、および③のうち公演の内容紹介が掲載されている情報提供を抽出したところ、177件であった(08年度:149件)。
- その内容を、「自主事業／提携・協力事業」、「学芸事業」、「貸館事業」、「その他(劇場全般、劇場職員への取材記事等)」に分類すると、それぞれ、86件、11件、57件、23件であった(図表4-5)。

(2) 広告掲載料をベースとした金額換算と評価

- これら177件の掲載記事について広告掲載料をベースに金額換算すると、約1億1,791万円という結果となっている(図表4-5)。
- 03年度は開館、04年度は「とびうめ国文祭」で話題性が高く、掲載記事(金額換算対象記事)の件数・文字量が多かったため、試算金額も高くなった。
- 05年度は「ルル」や「IRON」といった全国展開型の創造事業の公演数が多かったこと、06年度は「錦鯉」や「地獄八景」など全国展開型の創造事業の公演数が多かったことに加えて、「時の時の時ーとき」が朝日舞台芸術賞グランプリを獲得し、全国紙に掲載された記事が多かった。金額換算時の広告料は全国紙で高いため、05年度と06年度は全体の掲載件数は飛びぬけて多くはないが、試算金額が高いという結果になっている。
- 07年度以降は、毎月コンスタントに劇場事業や関係する劇団の記事などが掲載されるようになっている。試算金額は03～06年度と比べて低くなっているものの、記事としての掲載件数は減少していない。
- 09年度の掲載内容をみると、西日本新聞では「劇評」、朝日新聞(西部)では「(批評！舞台)」、読売新聞(西部)では「ハイ！」といった演劇や舞台に関する批評・紹介欄で、定

期的に劇場の公演事業に関する記事が掲載されている。熊本日日新聞、佐賀新聞といった九州他県の地方紙でも、「エンタメノート」欄等で、劇場の公演が紹介されており、北九州市域外での劇場事業の定着が新聞記事からうかがえる。

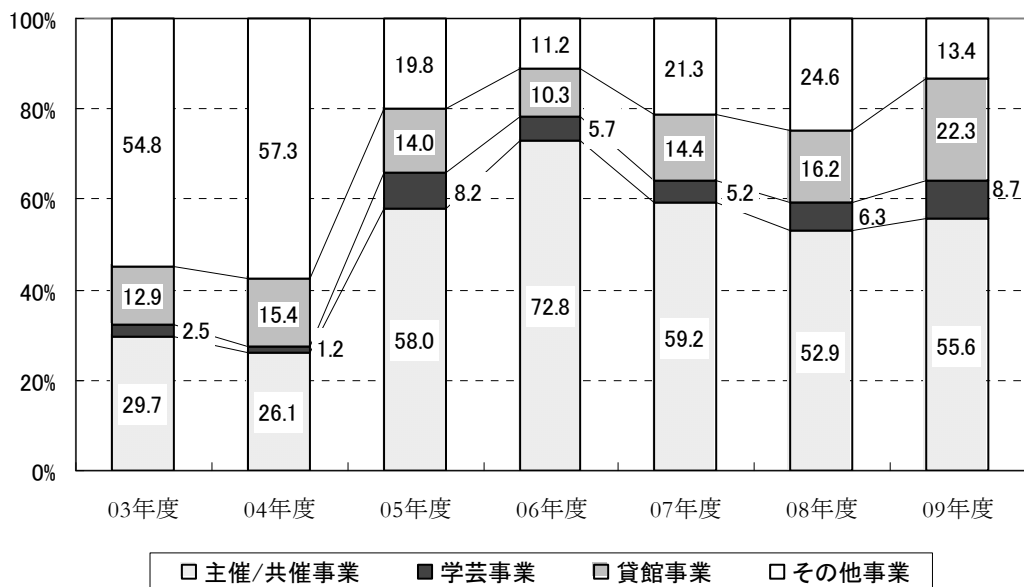
- また、劇場プロデュース作品である「江戸の青空」「ハコブネ」、「ツドエmeets北九州」や「リーディングセッション」といった創造・発信型の公演に関する掲載記事が多いことも、掲載記事件数の増加につながっているものと考えられる。
- 09年度の劇場事業に対する北九州市の補助金は約8,300万円であり、劇場事業は補助金を大きく上回るパブリシティ効果(約1億1千800万円)を生み出していると言える。

図表4-5 新聞掲載記事の内容と金額換算(03年度～09年度)

	2003年度		2004年度		2005年度		2006年度		2007年度		2008年度		2009年度	
	掲載 件数	金額換算 (千円)	掲載 件数	金額換算 (千円)	掲載 件数	金額換算 (千円)	掲載 件数	金額換算 (千円)	掲載 件数	金額換算 (千円)	掲載 件数	金額換算 (千円)	掲載 件数	金額換算 (千円)
主催/共催 事業	70	62,140	54	46,211	75	110,044	88	160,243	85	66,027	55	66,588	86	65,542
学芸事業	8	5,331	5	2,141	25	15,505	17	12,451	12	5,777	12	7,926	11	10,316
貸館事業	46	27,072	43	27,235	34	26,622	35	22,741	31	16,056	50	20,392	57	26,293
その他 事業	56	114,683	61	101,577	25	37,678	23	24,680	26	23,737	32	30,961	23	15,755
計	180	209,226	163	177,164	159	189,849	163	220,115	154	111,597	149	125,867	177	117,905

注) 金額換算は、写真を含めた記事面積と各新聞社の広告掲載料に基づいて、計算・集計した。

図表4-6 事業ごとの掲載割合 [金額換算値ベース](03年度～09年度)



第5章 北九州芸術劇場の広域的役割と長期的ビジョン

——グループインタビュー調査の結果から

今年度のグループインタビュー調査では、(1)九州圏域の拠点となる公立劇場としての北九州芸術劇場の役割、(2)創造拠点としての北九州芸術劇場の事業への評価、という2つのテーマを設定し、九州圏域の文化政策や公立文化施設の職員、劇団主宰者や制作者など5名を対象にしたグループインタビューと、創造事業に取り組む首都圏の代表的な公共劇場の制作責任者2名と北九州芸術劇場の館長を交えた座談会を実施した。

ここでは、グループインタビューと座談会における主要な意見を抽出し、上記二つのテーマを中心に、北九州芸術劇場の事業・運営について、開館以来の成果と課題を検証し、今後の広域的役割と長期的なビジョンを検討した。

(1) 劇場ミッションに基づいた事業に対する高い評価

- 「創る」「育つ」「観る」という劇場のミッション(運営方針)については、九州圏域の劇場関係者・演劇人や首都圏の劇場関係者ともに、高く評価している。
- この3つの方針をバランス良く実施しつつ、それぞれの質の高さを継続的に追求してきたことが、高い評価に繋がったと言えよう。
- また、3つの方針に基づいた事業に関わる各分野の専門家、地元のアマチュア、市民という三者の出会いや関係づくりが上手くいっているとの指摘がある。
- こうしたバランスの良さは、芸術監督制ではなく、プロデューサー制による運営の特性や利点が反映されたものと考えられる。
- 次なる期待として、「北九州から演劇界に一石を投じるオリジナリティのある作品が出てきてほしい」という期待も寄せられている。

[グループインタビューの主な意見から]

- 3つのコンセプトについて、作品をつくる公共劇場は全国にほとんどないので、先をいっているなどと思う。
- 北九州芸術劇場では、公共ホールとして求められることすべてやっている。オーソドックスなことをきちんとされていると感じる。
- 芸術監督のいない劇場として地域との関係を重視し、「創る、育つ、観る」のバランスを取ったミッションを強く押し出して、それを成功させた。

(2) 「北九州モデル」のアピールと次なる目標の確立

- 北九州芸術劇場は、北九州市を代表する劇場としてのポジションをすでに確立し、九州圏域の舞台芸術の専門的な機関として大きな役割を担っていることは、両方のグループインタビューでの共通認識となっている。
- 全国的に見ても、北九州芸術劇場のこれまでの成果は、類似する公立文化施設と比べて、一つの成功モデルと言えよう。
- 今後も引き続き文化・芸術を取り巻く環境の変化が予測される中で、公立文化施設のあり方として「北九州モデル」を提示することで、他の地方自治体(とくに政令市レベルの都市)に対する良い刺激となることが期待されている。
- 一方で、これまでの成功体験をこの先も持続させるだけではなく、「北九州モデル」としての成功を、他の地方自治体に発信・波及させながら、次なる目標を確立し、それに向かって

挑んでいくべきという意見もあった。

[グループインタビューの主な意見から]

- 北九州芸術劇場は非常にうらやましいし、あこがれの劇場でもある。
- 九州の中では、北九州芸術劇場のような場があるところがうらやましいと思っているところが多いだろう。
- 北九州のイメージが強くなると“北九州モデル”みたいなものができる。ここ3年間ぐらいは北九州モデルといってもいいくらい強いプログラム編成だと思う。
- 成功したらその成功を他にも分けてさらに次を目指すという方向に行けば次の成功が見える。次の成功が何なのか見えるといい。

(3) 福岡市の拠点文化施設との連携や機能分担

- 北九州芸術劇場の今後のビジョンを考えるにあたって、福岡市が計画中の拠点文化施設との連携や機能分担が重要な要因となることは、九州圏域の劇場関係者・演劇人ばかりか首都圏の劇場関係にも共通した認識である。
- 北九州芸術劇場の公演事業では、福岡市を含めて北九州市外からの観客は年々増加傾向にあるものの、将来的に福岡市に拠点文化施設が設置された場合、市外からの観客の減少という大きな影響が出ることは十分考えられる。
- そうした状況を考慮すると、グループインタビューで出た「今まで以上に『観る』という運営方針を拡大する必要はない」という見方は妥当と言えよう。
- むしろ、「観る」という方針では、福岡市と何らかの機能分担(例えば作品の特徴や観客の属性によって双方でプログラムを棲み分ける等)をした上で、「創る」や「育つ」に重点を置き、これまでの北九州芸術劇場の実績や強みを発揮していくことも、将来のひとつの方向性だと考えられる。

[グループインタビューの主な意見から]

- 今後、どのように棲み分けや連携ができるのかということを含め、福岡に劇場ができるとしたら、どういう劇場にすべきか、その方向性にアドバイスをいただきたい。
- 演劇のリーディングやダンスのワークショップには、福岡から参加している人が多い。鑑賞の場、創造支援の場を福岡の代わりに北九州がやってくれていると思っている。
- 福岡に芸術劇場ができたなら、「観る」でやってきた事業が大きく変わるので、北九州で何ができるのか自分たちで考えなければならない。

(4) 広域を視野に入れた劇場スタッフの人材育成

- 九州圏域の劇場関係者や演劇人は、北九州芸術劇場が人材育成面で果たす役割について非常に高く評価している。
- これまで、学芸事業が手掛けてきたワークショップでは、九州圏域や全国からトップクラスの俳優・ダンサーや劇作家・演出家が多数起用されており、参加者は非常にレベルの高い事業への参加が可能となっている。
- 一方で、劇場運営を支える人材育成は大きな課題のひとつとなっている。とくに、劇場運営の将来を見据えた場合、劇場の運営組織だけでなくすべての業務に対応するのではなく、劇場が連携できる外部の制作会社等の設立を視野に入れた人材の育成が望まれる。また、制作とは違うスキルの必要な学芸事業に必要なコーディネーターの育成も課題と言える。
- こうした人材は、北九州市のみならず、九州圏域、さらには中国・山陰地方を視野に入れな

がら育成し、北九州で学んだ人材が各地に戻っていくことで、劇場間のネットワークが構築されることも期待できよう。

[グループインタビューの主な意見から]

- 北九州芸術劇場では、スタッフを育てようとしているところもうらやましい。
- 長崎には舞台の専門家ももちろんいらっしゃるが、“演劇の舞台のことが分かる”専門家は育ちにくいので、困ったときには、北九州芸術劇場に相談している。
- 人材育成の中でも一番やらなければならないのは劇場運営に必要な専門のスタッフを育てること。北九州には制作会社がない。劇場の中の人を育てなければならないが、外の会社を増やし、適正なパートナーを見つけないと、この先劇場経営が難しくなるのではないかと懸念している。
- 学芸事業に力を入れている北九州芸術劇場が、九州の中で(財)地域創造のような役割を担えればいい。

(5) アジアとの国際交流、創造・発信への期待

- 九州圏域の劇場関係者や演劇人と、首都圏の劇場関係者が共通して北九州芸術劇場の次なる目標として期待しているのは、アジアとの国際交流や創造・発信への取り組みである。
- 北九州市との姉妹都市である韓国の仁川市とは、今後、「チャレンジ！えんげき」をベースとした交流プログラムが検討されており、アジアとの国際交流は具体化に向けて進みつつある。
- 今後の北九州芸術劇場の運営にとって、アジアとのつながりは、九州圏域だけでなく、日本国内でのプレゼンスを向上させるためにも、重要な戦略の一つではないか。

[グループインタビューの主な意見から]

- 各都市の演出家、作家の方々の協働作業は継続した上で、東アジアに手を伸ばしていただければ。北九州芸術劇場で海外に派遣事業を作ってもらえれば、すごくありがたい。
- 世界中のすごいものを北九州でみる事ができれば。そしてできればそれに参加できればと思う。
- 次の成功が何なのか見るといい。アジアや国際的な方向性が入ってくれるといい。
- 来年度から「チャレンジ！えんげき」を韓国の仁川と協働する。実は北九州市と仁川市は姉妹都市で、去年、仁川の富平(ブピョン)区にアートセンターが開館し、市長、区長ともお目にかかって、これから一緒にやっていきましょうということになった。

(6) 地域版アーツカウンシルとしての役割

- 劇場・音楽堂法(仮称)に関する議論や、独立行政法人日本芸術文化振興会によるアーツカウンシルの体制整備など、国レベルの文化政策は過渡期を迎えている。
- その中で、今後の北九州芸術劇場あるいは(財)北九州市芸術文化振興財団の長期的なビジョンには、地域版アーツカウンシルとしての役割や機能を視野に入れることが期待される。
- 北九州市文化振興計画(平成22年12月)には、「芸術・文化施設の活動について精査し、その機能、業績を正当に評価することで、より高次で活発な活動につなげる『(仮称)北九州アーツカウンシル』の設立を目指す」とある。
- 今回のグループインタビュー調査では、北九州市域内の文化施設や文化団体をつなぐア

ーツカウンスルというよりも、九州圏域全体の舞台芸術環境を視野に入れたアーツカウンスルの役割・機能が求められていることが分かった。

- 国レベルでのアーツカウンスル整備の動向を伺いながら、国や他の地方自治体(とくに九州圏域の県や市)との緩やかな連携も視野に入れて、地域版アーツカウンスルとしてのあるべき姿やアーツカウンスルに対する北九州芸術劇場の位置づけを検討していくことが重要だと考えられる。

[グループインタビューの主な意見から]

- 北九州芸術劇場は、東京より身近なモチベーションのものさし。
- 劇場・音楽堂法(仮称)が施行されると、地方がどんどん置きざりにされる気がしている。創ることに対しては助成がでていますが、普及啓発にはお金がつかない。
- 北九州で、やりたいけれどもできないのは研究機能。例えば大学で研究してきた人に公演事業や創造事業に取り組んでもらい、プロとして何を考え、やらなければならないかを理解してもらうことも必要。
- 圏域の中の劇場のポジションで考えると、圏域から人を集めて拠点になっていくというのと、拠点でありながら圏域全体における舞台芸術の振興を考えると、二つの方向がある。
- 国のアーツカウンスルとは別に、地域版アーツカウンスルのようなものが北九州市の文化振興計画の中にも入っている。
- アーツカウンスルがしっかりして、いろんな劇場に対してもものが言えるのであれば、課題のある地域の劇場や逆に頑張っているところに必要な手を差し伸べるといいと思う。

第6章 評価フレームに基づいた事業評価結果

最後に、03年度から09年度までの7ケ年の北九州芸術劇場の事業評価結果をとりまとめた。07年度までは、初年度(2003年度)の調査研究で設定した事業評価の基本フレームで整理していたが、08年度に、(財)地域創造の「公立ホール・公立劇場の評価指針」(2007年3月)の評価フレームに基づいて再整理し、今年度もそれに沿ってとりまとめを行った。

1. 評価フレームの考え方

「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレームは、「A.設置目的」、「B.運営・管理」、「C.経営」という3つの戦略・評価軸を設定し、それぞれに評価大項目(戦略目標)を設定、さらに評価中項目(戦略)とそれを評価するための評価指標・基準を設定している。

図表6-1は、A、B、C、3つの戦略・評価軸の評価大項目を整理したものである。

図表6-1 「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価フレーム(評価軸と評価大項目)

戦略・評価軸	No	評価大項目
A 劇場の設置目的	A-0	劇場のミッション
	A-1	鑑賞系事業
	A-2	創造系事業
	A-3	普及系事業①:主に劇場内で実施するワークショップや講座など
	A-4	普及系事業②:アウトリーチ(学校、福祉施設等との連携など)
	A-5	市民文化活動支援(市民参加型事業、アマチュア支援など)
	A-6	地域への貢献①(地域経済への波及効果など)
	A-7	地域への貢献②(地域アピール、ブランド力のアップなど)
	A-8	広域施設としての役割発揮
B 運営・管理	B-1	場の提供・支援(貸館)
	B-2	施設のホスピタリティ・サービス
	B-3	施設の維持管理
C 経営	C-1	経営体制
	C-2	リサーチ&マーケティング
	C-3	経営努力

09年度は、上記図表6-1の基本フレームに基づいて、03年度から09年度の7ケ年で把握したデータや情報をあらためて整理した。整理にあたっては、次の3点を大きな方向性とした。

- 事業評価調査の結果を、定量評価(事業実績データ、アンケート調査データ)とともに、定性評価(グループインタビュー)の結果も含めて、総合的に整理する。
- 「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準を網羅することを目的とはせず、基本フレームを活用することにより、北九州芸術劇場の事業実績や運営の状況を体系的に把握することを目的とする。

- そのため、「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準と一致しない箇所がある。また、段階評価(達成度合いを自己点検できる解説式のモデル指標)項目については、劇場・ホール内部の自己評価であることから、本報告書では掲載対象外としている。

2. 評価結果の概要

基本フレームの評価項目ごとの評価結果は、図表6-3に一覧表として整理し、そのポイントを以下に記述した。 ※割合(%)の記載は、小数点以下を四捨五入して掲載した(図表6-3も同様)。

A. 劇場の設置目的

A-0 ミッション –「創る」「育つ」「観る」

①劇場の運営方針(ミッション)の有無と内容、ミッションの浸透の状況等

- 劇場では開館年度から、「創る」「育つ」「観る」の3つの運営方針を設定している。
- 09年度も、3つの運営方針に基づき、北九州からの発信と地元演劇人の発掘、育成を意識した創造事業、舞台関係者の育成や子どもや学校などを対象とした積極的な学芸事業、小劇場・現代演劇に多様なラインナップを揃えた公演事業を展開し、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業が一体となった事業構成となっている。
- 09年度に実施したグループインタビューでは、九州圏域の劇場関係者・演劇人や首都圏の劇場関係者ともに、「創る」「育つ」「観る」それぞれの事業について高く評価している。この3つの方針をバランス良く実施しつつ、それぞれの質の高さを継続的に追求してきたことが、高い評価に繋がったと言えよう。
- 北九州芸術劇場は、北九州市を代表する劇場としてのポジションをすでに確立し、九州圏域の舞台芸術専門機関として大きな役割を担っていることは、グループインタビューでの共通認識となっている。一方で、この先はこれまでの成功体験を持続させるだけではなく、「北九州モデル」としての成功を、他の地方自治体に発信・波及させながら、次なる目標を確立し、それに向かって挑んでいくべきという意見もあった。

②劇場の運営方針を支持する市民の割合(市民の支持率)

- 観客の運営方針への支持率(※)は、「創る」「育つ」「観る」いずれについても、開館の03年度から継続して90%を超えている。
※「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。

③劇場の来場者(利用者)数

- 北九州芸術劇場への年間来場者(利用者)数は、05年度以降、毎年27~28万人で推移している。09年度は28万6,000人、この7年間で延べ193万人を超えた。07年7月1日現在の北九州市の人口(推計値)は約97万6,000人であり、すでに人口のおよそ2倍の利用者が来場したことになる。
- 今後、北九州芸術劇場を地域になくてはならない施設として定着させていくためには、5年後、10年後を見据えた長期的な事業の展開と継続が必要であろう。

A-1 鑑賞系事業 [観る]

[観る]: 観る楽しみを知ってもらうため、国内外のエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民に様々な公演を提供する。

①ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施

- 09年度も、「観る」(鑑賞事業)では、中劇場を中心とした小劇場・現代演劇、話題性・芸術

性の高いダンス・現代舞踊のほか、ミュージカル・商業演劇など幅広いラインナップの公演が行われ、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場している。

②年間延べ観客数

- 09年度は、公演事業については、16事業で42回の公演が行われた。入場者数は19,439人、入場率は95%である。
- 創造事業、提携・協力事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、28事業、公演回数は105回。入場者数は36,783人、入場率は94%(過去7年間で最高の入場率)となっている。

③公演に対する観客の満足度

- 観客調査の結果から公演(主催／提携・協力事業)に対する観客の満足度をみると、開館年度(03年度)から継続して「(本日の)公演内容」への満足度の高さが顕著で、09年度も満足層の割合(※)は98%で、そのうち「たいへん満足」の割合が51%と、観客からの高い評価を得ている。なお、この公演に対する観客の満足度には、次項の「創造系事業」も含まれる。

※「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。

- あわせて、「(本日の)公演のチケット料金」も満足層の割合は90%以上であり、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映されていると考えられる。

④鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価

- 09年度に実施した九州圏域の劇場・演劇関係者へのグループインタビューでは、魅力的な作品を招聘しているという評価や、東京や大阪からの演劇作品の受け皿として、九州圏域の代表的な劇場であるという共通認識がある。
- 09年度のグループインタビューで、九州圏域の劇場関係者・演劇人や首都圏の劇場関係者ともに、将来的に福岡市に拠点文化施設が設置された場合に連携や機能分担が重要になるだろうという点は共通認識であった。北九州芸術劇場としては、市外からの観客層に影響が出ることは十分考えられるため、「今まで以上に『観る』という運営方針を拡大する必要はない」との意見も出された。

A-2 創造系事業 [創る]

[創る]: 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していく。

①ミッションに基づいた創造系事業の実施

- 09年度も、全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な創造系事業が実施された。
- 「江戸の青空～Keep On Shackin'～」、「ハコブネ」のプロデュース作品は、東京で計18回の公演を行い、8,928人が来場した。
- 「北九州パントマイム教室」、「シアターラボ2010」では入場率が100%を超えており、入場率90%以上の創造事業が5事業と、市民への定着度と支持の高さがうかがえる。
- 開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、創造系事業を効果的に実施し、地域に根付かせていこうとする努力の成果がうかがえる。

②年間延べ観客数

- 09年度、「創る」では、6事業で40回の公演が行われ、入場者は13,530人、入場率は平均で

95%と高い入場率となっている。

④創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果

- 09年度の首都圏の劇場関係者によるグループインタビューでは、「北九州から演劇界に一石を投じるオリジナリティのある作品が出てきてほしい」という期待も寄せられている。また、九州圏域の劇場関係者や演劇人も共通して北九州芸術劇場の次なる目標として期待しているのは、アジアとの国際交流や創造・発信への取り組みである。

A-3-4 普及系事業 [育つ] ※A-3が講座・ワークショップ、A-4がアウトリーチ

[育つ]:アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指す。

①ミッションに基づいた普及系事業の実施

- 「育つ」については、開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、劇場内には学芸係を設置し、継続的な事業を実施している。
- 09年度は、
 - ワークショップや講座等の事業として、「劇場塾」、「月1ダンス部」、「バックステージツアー」、「チャレンジ！えんげき」、「高校生のための演劇塾」
 - 学校でのアウトリーチ事業として「ドラマ・ワークショップ」や「学校出前演劇ワークショップ」、「公共ホール演劇ネットワーク事業」などの、演劇や人形劇のワークショップ
 - 市民センターでの小学生から一般市民を対象としたアウトリーチ事業として、「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」(3ヶ年計画の1年目)
 - 創造参加として、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」といった、市民が舞台芸術に触れる機会や創造参加への機会の提供に取り組んでいる。
- アウトリーチ型の事業が増えており、地域や他分野との連携を進めようという方針がより明確になっている。

②年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数

- 09年度は、12事業、175回のアクティビティが実施された。参加延人数・入場者数の合計は5,889人、受講(入場)者数でカウントすると1,982人である。08年度の279回、10,577人と比べると、アクティビティの回数、参加者数ともに減少している。
- 減少した要因としては、08年度まで実施してきた「表現教育推進事業」(特定の小学校での4～6年生を対象とした継続した取り組み)から、1つの学校での回数を抑えて実施する学校を広げるように方針を転換したことが大きい。

A-5 市民文化活動支援(市民参加型事業、アマチュア支援など)

①ミッションに基づいた市民活動支援の実施

- 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として市民が舞台に立つ公演事業を実施しており、09年度は、「シアターラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」、「人形劇俳優“たいらじょう”の世界」の4事業で70回のワークショップとアウトリーチが実施された。
- 参加延人数・入場者数の合計は2,217人、公演は90%以上(「シアターラボ」、「北九州パントマイム教室」では100%以上)の極めて高い入場率となっている。
- 「シアターラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」(08年度以前は

「北九州パントマイムフェスティバル」は開館の03年度あるいは04年度から継続実施されている事業である。入場率も高く、市民に定着していることがうかがえる。

②貸館事業に関するサービス内容、質への評価(専門的・技術的なアドバイスやサービスなど)

- 貸館利用者を対象とするアンケート調査で専門的・技術的サービスに関わる項目をみると、「技術的な助言や援助は適切だった」は100%、「技術スタッフの対応はよかった」は99%と、満足層の割合は大変高い。関連する項目として、「舞台設備機器は充実していた」、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台裏の施設等が使いやすかった」をみても、満足層の割合は90%以上となっている。これら項目では、「はい」という積極的な評価も高い。
- 劇場の専門的・技術サービスについては、利用者から高い信頼と評価を受けており、自由回答の書き込みも、それを裏付ける内容が多い。
(なお、09年度からテクニカルアドバイザーによるアドバイスの提供など、公演・講演に対する支援体制が強化された。)

A-6 地域経済などへの波及効果

①他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容

- 北九州芸術劇場では、開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、継続的な活動を実施している。
- また、開館年度(03年度)から市内の延べ5つの区・市民センターを拠点に、ワークショップを通しての作品創りや小劇場でプロのスタッフを交えての成果発表を行ってきた「北九州ドラマ創作工房」を実施している。
- 09年度から「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」事業を立ち上げ、地域との連携を強化した。14回のワークショップで参加延人数が304人となっている。

②学校等と連携したプログラム数と参加者数

- 09年度に、学芸事業の中で実施したアウトリーチプログラムは、「学校出前演劇ワークショップ」、「ドラマ・ワークショップ」、「人形劇俳優“たいらじょう”の世界」など3事業。計31回のアクティビティを実施し、参加延人数の合計は1,676人となっている。

③地域外からの来場者割合

- 観客アンケート結果をみると、07年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域(福岡市を初めとする九州各地、山口県など)からの来場者の割合が増えており(06年度:21%、07年度:31%、08年度:31%、09年度:33%)、北九州市域以外でも、北九州芸術劇場の舞台芸術の鑑賞拠点としての認知度と評価が定着してきていることがうかがえる。

④公演鑑賞に伴う消費行動

- 観客アンケートから鑑賞前後の消費行動をみると、09年度の飲食またはショッピングをした人の割合は59%で、毎年ほぼ60%で推移している。
- 飲食をしている割合は50%で平均金額は約1,500円、ショッピングをしている割合は27%で平均金額は約4,600円となっている。

⑤経済波及効果

- 上記公演鑑賞に伴う消費行動も含めた09年度の経済波及効果を算出すると、最終需要は、劇場の運営管理が約6.7億円、主催事業が約3.1億円、主催事業の観客の消費支出が約1.8億円となっている。
- それらの経済波及効果は、約17.0億円である。

- また、データ収集の制約から参考値ではあるが、貸館事業に基づいた経済波及効果については、最終需要が約5.8～6.7億円、経済波及効果が約7.8～9.0億円である。
- 経済波及効果の誘発係数は、運営管理と主催事業(観客消費支出含む)で1.46、貸館を含めると1.42となっている。試算を始めた04年度以降、運営管理・主催事業の誘発係数は1.45～1.47となっており、北九州芸術劇場の運営は、相応の経済波及効果をもたらしていることが明らかとなっている。
- 雇用効果については、就業者ベースで137～145人、雇用者ベースで117～125人という結果となっている。

A-7 地域アピール、ブランド力のアップ

①パブリシティ効果

- パブリシティ効果についてみると、北九州芸術劇場や劇場事業に関する09年度の記事掲載件数は177件である。開館からの7年間のうち09年度は、開館年で話題性の高かった03年度(180件)に続いて多い掲載件数となった。
- 新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、09年度は約1億1千800万円となる。
- これは、市の事業に対する補助金約8,300万円を大きく上回る数字となっており、北九州芸術劇場の事業や運営は高いパブリシティ効果を生み出している。

A-8 広域施設としての役割発揮

①圏域内の市町村の劇場・ホールとの積極的な連携

- 09年度に実施した九州圏域の劇場・演劇関係者へのグループインタビューでは、舞台の専門家が少ない地域の公立ホールや公立劇場で、「困ったときには北九州芸術劇場に相談したり、北九州芸術劇場を手本とする」といった意見が聞かれた。
- また、「シアターラボ」、「エンゲキで私イキイキ」といった「創る」「育つ」事業で九州圏域における演劇人の人材育成に貢献しており、北九州芸術劇場のプロデュース作品の九州圏域での巡回公演の可能性について期待する意見も多い。

②当該文化施設の運営だけにとらわれない圏域全体の文化振興

- 北九州芸術劇場の事業や運営は福岡市にも波及している。「福岡のみならず九州圏域で、今後、どのように棲み分けや連携ができるのか、検討が必要」との九州圏域の劇場・演劇関係者の意見が聞かれた。
- 今後の北九州芸術劇場あるいは(財)北九州市芸術文化振興財団の長期的なビジョンには、地域版アーツカウンシルとしての役割や機能を視野に入れることが期待されるが、09年度のグループインタビュー調査では、九州圏域全体の舞台芸術環境を視野に入れたアーツカウンシルが求められていることが分かった。

B. 運営管理

B-1 場の提供・支援(貸館事業)

①ミッションに基づいた貸館事業の実施

- 貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づけられている。

②貸館事業における入場者数

- 09年度の貸館の公演・講演事業数は233事業。計320回の公演・講演が実施され、入場者

数は166,922人となっている。

③利用者の満足度

- 貸館利用者を対象とした利用者調査の結果では、劇場利用に関する総合的な満足度は99%で、利用者のほぼ全員が満足している。また、今後の利用意向も99%と高いことは、満足度の高さの現れといえよう。
- 具体的な項目をみても、スタッフの応対や説明などソフト面に対する満足度(※)は、「開館時間が適当である」を除いて95%以上と非常に高い。また、「はい」という積極的な評価の割合も高い。
※「はい」+「どちらかと言えば『はい』」の割合。無回答は除く。
- 05年度(利用者調査開始年度)以降、情報入手や利用問い合わせ、スタッフの対応など多くの項目で満足度は向上しており、利用者の苦情や要望に対する劇場スタッフの前向きな対応の成果がうかがえる。

B-2 施設のホスピタリティ・サービス

①公演や催し物情報に関する満足度

- 開館年度(03年度)に満足度が65%であった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、09年度は87%(06年度:79%、07年度:81%、08年度:86%)とさらに上昇している。開館から7年が経過し、観客が劇場に慣れてきたことであろうが、劇場側の情報発信への工夫や努力も大きいと思われる。

②ホスピタリティに関する満足度

- 03年度に満足度が73%であった「劇場の入口・案内表示のみやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、09年度は88%(06年度:79%、07年度:82%、08年度:87%)とさらに上昇している。
- 満足度の上昇は、①公演や催し物情報に関する満足度と同様に、開館から7年が経過し、観客が劇場に慣れてきたことであろうが、案内表示の増設や既存サインの大型化など、劇場側の工夫によるところも大きいといえる。
- 「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、09年度は96%となっている。

③スタッフの応対や電話応対等に関する満足度

- 03年度から満足度の高かった「劇場係員の応対」は、継続して高い満足度を保っており、09年度も約98%と、満足層の割合はほぼ100%近い。また、「電話予約やチケットカウンターの応対」についても満足度は約96%で、劇場の顧客応対は高い評価を受けている。今後も高い満足度の維持に向けた取り組みが望まれる。
- 「チケットの予約・購入のしやすさ」は、03年度は53%と満足度項目のうち最も低かったが、04年度に73%に上昇、その後年々満足度は上昇し、09年度は86%となっている。

④飲食に関する満足度

- 劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移してきたが、07年度に80%に達し、09年度は86%となっている。

B-3 施設の維持管理

①施設の維持管理

- 貸館利用者を対象としたアンケート調査をみても、劇場の施設や設備などのハード面で高

い満足度となっている。特に、「館内は清潔に保たれていた」、「ホワイエや客席などの雰囲気よかった」、「舞台設備・機器は充実していた」、「設備・機器などを安全に使用することができた」については、「はい」への回答がほぼ90%以上と大変高い評価となっている。また、05年度(利用者調査開始年度)以降、多くの項目で満足度は向上しており、劇場スタッフの努力がうかがえる。

②稼働率

- 施設稼働率は、大ホールが74%、中劇場が82%、小劇場が84%である。
- 開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70～80%で推移しており、2010年度の(財)地域創造の悉皆調査結果(2010年10月1日時点でのデータ。専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72%)と比較しても高い水準にある。

C. 経営

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ&マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。

C-3 経営努力

①外部資金、チケット収入の割合

- 北九州芸術劇場の09年度の事業費は約3億1,000万円。財源内訳をみると、チケット収入が全体の約65%、市の補助金が約27%、文化庁と(財)地域創造からの外部資金が約8%となっている。
- チケット収入の割合は、2007年の(財)地域創造の悉皆調査結果による全国平均の試算値(事業収入:37%)を大幅に上回っている。外部資金の割合については、北九州芸術劇場の実績よりも全国平均(11%)が上回っている。

②事業収支からみた経営努力

- 事業収支面でも、開館以来培ってきた交渉力や事業の効率性の向上、交通費や宿泊費に関する積極的な経費削減(団体割引の適用等)の努力が行われていることが数字からうかがえる。
- 09年度の文化振興特別会計の収入の部の決算報告では、予算額と決算額の差は、予算額を約4,400万円上回る事業収入があり、補助金収入は予算額から約8,800万円削減されるなど、運営や事業の実施にあたっての経費削減、営業努力がうかがえる。

3. 事業評価の結果から—今後の事業評価の方向性と検討課題

北九州芸術劇場の事業評価調査では、03年度の開館年度から図表6-2のと通りの調査を行ってきた。

図表6-2 北九州芸術劇場における実施調査

調査内容	03年度	04年度	05年度	06年度	07年度	08年度	09年度
------	------	------	------	------	------	------	------

【継続調査】

劇場運営基礎データの収集・分析							→
観客調査(アンケート)							→
貸館利用者を対象としたアンケート調査 (実施:05年度～、整理・分析:07年度)						→
経済波及効果の算出							→
パブリシティ効果の把握							→

【テーマ調査】

専門家による座談会(開場から1年間の劇場運営の成果について)		○					
市民意識調査(アンケート)			○				
ワークショップ参加者を対象とした学芸調査(アンケート/グループインタビュー)		○					
学校を対象とした学芸調査(アンケート)					○		
(舞台芸術の公演による)劇場使用者へのグループインタビュー				○			
劇場スタッフへのグループインタビュー						○	
北九州芸術劇場の広域的役割と長期的ビジョンに関するグループインタビュー							○

今後事業評価を進めていくにあたっては、次の5つの点を検討・実施していくことが必要だと考えられる。

1つ目は、継続調査の実施である。経年変化による劇場運営、事業に関する満足度やニーズの分析のためにも、上記5つの継続調査を引き続き実施し、データや情報を蓄積することが望まれる。

2つ目は、劇場が地域や市民に与える波及効果や影響を把握するための、テーマ調査にお

ける定性調査の実施である。近年、劇場と地域との連携がより強く求められる中、①観客(あるいはチケットクラブ会員)、②創造事業や市民参加事業に参加した市民、③地域(市民センターなど)でのアウトリーチ事業参加者などを対象としたグループインタビューや聞き取り調査を行い、劇場運営や事業に関する詳細な意見、成果を把握する機会が必要であると考えられる。また、05年度の市民意識調査の実施から5年が経過していることから、今後も、例えば5年ごとに同様の市民調査の実施を検討する必要があるだろう。

3つ目は、劇場内部での事業評価結果の活用である。昨年度の劇場スタッフへのグループインタビューからは、①本事業調査結果も含めて、劇場内で蓄積しているデータを有効に活用していくこと、②評価結果について、係を越えた情報共有や振り返りの機会を持つこと、が必要だという声が多かった。今後は、評価本来の目的であるPDCAサイクル(Plan→Do→Check→Action)をより有効に機能させるためにも、事業評価調査の結果を現場での業務の振り返りに有効活用するとともに、データの収集や整理にあたって、スタッフの関わりを促していくことが必要であると考えられる。

4つ目はさらなる評価結果の発信である。北九州芸術劇場は、ホームページ上で劇場の運営方針を広く周知し、事業評価調査の報告書(本編)をホームページで公開するなど、市民へのアクセシビリティに努めている。今後、評価結果も含め、劇場運営や事業の成果に関する市民への情報発信をより一層強化するとともに、市民からの意見を聴取するためのしくみづくりを検討していく必要があるだろう。

そして5つめが、これまでの事業評価の結果を踏まえた次の北九州芸術劇場の戦略構築である。今年度のグループインタビュー調査では、これまでの劇場の事業や運営を高く評価するとともに、それらを継続するだけでなく、次の目標設定とそれに向けた取り組みの必要性を指摘する意見があった。開館から7年半が経過し、開館当初に設定した目標が徐々に達成されつつあることを考えると、ミッションの再確認や見直し、それに基づいた事業や運営方針の再検討も視野に入れた取り組みが期待される。

図表6-3 政策評価フレームに基づいた評価結果一覧

※この評価結果一覧は、(財)地域創造「公立ホール・公立劇場の評価指針」(平成19年3月)の評価フレームに基づき、北九州芸術劇場で03年度～09年度に実施した事業評価調査の結果を整理したものである。
 ※事業評価の結果を、定量評価(事業実績データ、アンケート調査データ)とともに、定性評価(グループインタビュー等)の結果も含めて総合的に整理した。
 ※「公立ホール・公立劇場の評価指針」の評価指標・基準を網羅することを目的とはせず、基本フレームを活用することにより、北九州芸術劇場の事業実績や運営の状況を、体系的に把握することを目的としている。
 ※したがって、「公立ホール・劇場の評価指針」の評価指標・基準とはすべてが一致するものではない。また、段階評価(達成度合いを自己点検できる解説式のモデル指標)項目については、劇場内部の自己評価であることから本報告書では掲載対象外としている。

A: 劇場の設置目的

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-0 「創る」「育つ」「観る」	① 劇場の運営方針(ミッション)の有無と内容、ミッションの浸透の状況等	<ul style="list-style-type: none"> 劇場では、開館年度から「創る」「育つ」「観る」の3つを運営方針として設定。 [九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09]では、「創る」「育つ」「観る」の3つの運営方針に基づいたそれぞれ事業について、高い評価を受けている。 [全国の劇場関係者へのグルイン/09]では、芸術監督のいない劇場として地域との関係を重視した運営について、高い評価を受けている。 	<ul style="list-style-type: none"> 3つの運営方針への支持率は、観客、市民、九州圏域や全国の劇場関係者からも高い。 	<ul style="list-style-type: none"> 劇場内部での、事業評価結果を活用したPDCAサイクルの実現のための議論の場の設定、きっかけづくり。 観客調査の継続。 長期的な視点(5年ごと、10年ごとなど)での市民調査の検討、実施。 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。 「次なる目標」としての事業方針と、その評価手法の検討。
	② 劇場の運営方針を支持する市民の割合(市民の支持率)	<ul style="list-style-type: none"> 運営方針への観客からの支持率は、「創る」「育つ」「観る」いずれについても、開館年(03年)度から90%以上。 ○09年度 創る:96%、育つ:94%、観る:99% [観客調査/09年度] 一般市民からの支持率も、「創る」「育つ」「観る」いずれについても80%以上。 ○創る:96%、育つ:90%、観る:90% [市民意識調査/05年度] ※支持率は、「ぜひやってほしい」+「まあやってほしい」の割合。無回答を除く。割合(%)は小数点以下を四捨五入して掲載。	<ul style="list-style-type: none"> 一方で、次なる目標を確立し、それに向かって挑んでいくべきとの意見も。 	
	③ 事業や運営に対する自己評価や振り返り、運営データの蓄積	<ul style="list-style-type: none"> 業務の振返り、データを蓄積・活用して評価や業務にフィードバックしていくことが必要だという認識が高い。[劇場スタッフへのグルイン/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 事業評価データ等を活用し、係を超えた振返りの機会づくりが必要。 	
	④ 市民の劇場の認知度や劇場への意見	<ul style="list-style-type: none"> 市民の劇場の認知度(劇場があることを「知っている」と回答した割合)は84%、知っている場合の来場・利用率は44%、来場したことがない場合の今後の来場意向は69%。[市民意識調査/05年度] 劇場に来場経験を持つ市民を増やすこと、劇場の存在を肯定的に考えてくれる市民を増やすことは、劇場スタッフへのグルインでも、業務を超えた共通の問題意識。[劇場スタッフへのグルイン/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 劇場をなくてはならない施設として位置付けていくためには、長期的な事業の継続が必要。 	
	⑤ 劇場の来場者(利用者)数	<ul style="list-style-type: none"> 年間来場者(利用者)数は、05年度以降、毎年27～28万人で推移。09年度は1年間で28万6,000人、開館からの7年間で延べ193万人が来場。 	<ul style="list-style-type: none"> 北九州市の人口('11年3月1日現在)は約97万6,000人であり、すでに人口のおよそ2倍の利用者が来場。 	
A-1 「観る」 観る楽しさを知ってもらうため、舞台芸術の先進都市からエンターテインメント性や芸術性の高い作品を招き、市民にさまざまな公演を提供します	① ミッションに基づいた鑑賞系事業の実施	<ul style="list-style-type: none"> 中劇場を中心とした小劇場・現代演劇、話題性の高いダンス・現代舞踊のほか、ミュージカル・商業演劇など幅広いラインナップの公演事業を実施。 09年度から北九州芸術劇場が注目する演劇人たちをバックアップする「ツドエmeets北九州」を立ち上げた。 多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客が来場。 ○年齢層 29歳未満:19%、30歳代:29%、40歳代:22%、50歳代:18%、60歳以上:13% 平均年齢:42歳。 ○北九州芸術劇場での鑑賞経験 今日が初めて:22%、1～2回:15%、3～5回:24%、6回以上:33% 6回以上は年々増加 06年度:24% ⇒07:25% ⇒08:33% ⇒09:33% 北九州市域外(北九州市内+北九州近隣地域を除く)からの観客も増加。 06年度:21% ⇒07:31% ⇒08:31% ⇒09:33% [観客調査/09年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 小劇場・現代演劇を中心に、幅広い事業構成で、多様な年齢層、多様な鑑賞経験を持つ観客を集客。 公演事業全体で極めて高い入場率。 	<ul style="list-style-type: none"> 観客調査の継続。 観客の意識やニーズを詳細に把握するための調査の実施 有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
	② 年間延べ観客数	<ul style="list-style-type: none"> 09年度は、公演事業については、16事業、公演回数は42回、入場者数は19,439人である。入場率は95%。 創造事業、共催・提携事業、演劇フェスティバルも含めた鑑賞系事業全体では、28事業、公演回数は105回、入場者数は36,783人である。入場率は94%(過去7年間で最高の入場率) 	<ul style="list-style-type: none"> 北九州市域外からの観客も増加しており、九州の鑑賞拠点として、劇場が認知・評価されている。 	
	③ 公演に対する観客の満足度	<ul style="list-style-type: none"> 開館年から「公演内容」への満足度の高さが顕著。満足層の割合は98%、「たいへん満足」の割合も51%と半数以上を占める。 「公演のチケット料金」への満足度も高く、「公演内容」への評価の高さが「公演のチケット料金」の満足度にも反映していると考えられる。 満足層の割合(「たいへん満足」+「まあ満足」の割合。無回答を除く。) ○公演内容 03年度:96% ⇒04:96% ⇒05:97% ⇒06:97% ⇒ 07:98% ⇒08:97% ⇒09:98% ○公演のチケット料金 03年度:86% ⇒04:88% ⇒05:92% ⇒06:90% ⇒ 07:92% ⇒08:93% ⇒09:93% [観客調査/09年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 「観る」に対する観客・市民の支持率、公演内容に関する観客の満足度も極めて高い。 劇場使用者(カンパニーや劇団を対象、06年度実施)へのグループインタビューや専門家へのインタビュー(04年度)でも概ね高評価。 	
	④ 鑑賞系事業による芸術団体やアーティストからの評価	<ul style="list-style-type: none"> 公演事業での劇場使用者からも、劇場の運営方針や実施事業への支援の声、期待の声が大きい。特に、劇場スタッフの対応については、人間関係・信頼関係が作れる劇場であるとの評価が高い。[劇場使用者を対象としたグルイン/06年度] [九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09]でも、魅力的なものを呼んでいるという評価や、東京や大阪からの演劇作品の受け皿として、九州圏域の代表的な劇場であるという共通認識がある。 [全国の劇場関係者へのグルイン/09]では、将来的に福岡市に拠点文化施設が設置された場合、市外からの観客層に影響が出ることは十分考えられるため、「今まで以上に『観る』という運営方針を拡大する必要はない」との意見も出された。 	<ul style="list-style-type: none"> 「観る」という方針では、福岡市と何らかの機能分担をした上で、「創る」や「育つ」に重点を置いていくことも、将来のひとつの方向性だと考えられる。 	

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
<p>A-2</p> <p>【創造系事業】</p> <p>「創る」 北九州芸術劇場のオリジナル・プロデュースの演劇作品を創ることにより、“ものづくりの街”北九州市をアピールし地域の活性化を促していきます</p>	<p>① ミッションに基づいた創造系事業の実施</p> <p>② 年間延べ観客数</p> <p>③ 創造系事業の公演に対する観客の満足度</p> <p>④ 創造系事業による芸術団体やアーティストへの効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な事業が実施されている。開館当初から継続して実施されている事業に新規企画事業を加えながら、効果的に事業を展開している。 ・「江戸の青空～Keep On Shakin'～」、「ハコブネ」のプロデュース作品は、東京で公演を実施。(計18回の公演を行い、8,928人が来場)。 ・09年度は、6事業で40回の公演が行われ、入場者は13,530人。入場率は平均で95%。 ・「北九州パントマイム教室」「シアターラボ」の入場率は100%以上。90%以上の事業が5事業。 ・鑑賞系事業③を参照 ・北九州・福岡の若手劇団・カンパニーから、「劇団相互、あるいは北九州・福岡の連携が強まった」、「プロデュース事業等に関わることで役者や劇団のレベルアップになった」と評価。[劇場使用者を対象としたグルイン/06年度] ・[九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09]でも、利用の自由度の高さやスタッフの専門性の高さを評価している。 ・[全国の劇場関係者へのグルイン/09]では、「北九州から演劇界に一石を投じるオリジナリティのある作品が出てきてほしい」という期待も寄せられている。また、次なる目標としてアジアとの国際交流や創造・発信への取り組みが期待されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全国発信型、地元演劇人の育成型、市民参加型などの多様な事業を実施し、高い入場率を確保。市民に事業が定着していること、地域からの注目度の高さがうかがえる。 ・「創る」に関する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 ・九州圏域や全国に視野を広げたいうえでも、北九州芸術の「創る」事業には大きな期待が寄せられている。 ・今後の北九州芸術劇場の運営にとって、アジアとのつながりは重要な戦略の一つと考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観客調査の継続。 ・創造系事業参加者の意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 ・有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。
<p>A-3 A-4</p> <p>【普及系事業】</p> <p>「育つ」 アーティストを小・中学校等に派遣するアウトリーチ活動や劇場サポーター組織を通じてのヒューマンネットワーク作り等により、舞台芸術の手法を用いた人材育成・教育普及事業を行い、地域を育てながら地域とともに育っていく劇場を目指します</p>	<p>① ミッションに基づいた普及系事業の実施</p> <p>② 年間の事業数、アクティビティの回数、参加人数</p> <p>③ 講座・ワークショップ参加者の満足度</p> <p>④ 参加者が事業から得たもの(事業の効果) ー講座・ワークショップ</p> <p>④ 参加者が事業から得たもの(事業の効果) ー学校との連携事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、劇場内には学芸係を設置し、継続的な事業を実施。 ・09年度も、<ul style="list-style-type: none"> ○ワークショップや講座事業型の事業として、「バックステージツアー」、「チャレンジ！ えんげき」、「月1ダンス部」、「劇場塾」、「高校生のための演劇塾」など ○アウトリーチ事業として、「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」、「ドラマ・ワークショップ」、「学校出前演劇ワークショップ」など学校や市民センターを対象とした事業など ○創造参加として、「シアターラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」などの多様なプログラムを実施。 ・09年度は、12事業、175回のアクティビティが実施され、参加延人数・入場者数の合計は5,889人。 ※受講(入場)者数でカウントすると1,982人 ・08年度と比べると、アクティビティの回数、参加者数がともに減少しているが、その要因としては1つの学校での回数を抑えて実施する学校を広げるように方針を転換したことが大きい。 ・講座・ワークショップ参加者の事業に関する評価はたいへん高い。[学芸調査・アンケート/04年度]<ul style="list-style-type: none"> ○参加者の講座やワークショップに対する総合的な満足度 満足層:98%、うち「たいへん満足」:56% ○「たいへん満足」の割合が高い項目 講座・ワークショップの内容(63%)、講師(72%)、劇場係員の応対(63%) ・講座やワークショップに参加したことで、参加者は次のような効果があったと感じている。[学芸調査・アンケート/04年度]<ul style="list-style-type: none"> 「人間関係に広がり生まれた」(67%)、「演劇やダンスに新たな興味がわいた」(65%)、「劇場が身近になり、足を運ぶ回数が増えた」(57%)、「より多くの公演を鑑賞したいと思った」(50%)、「仕事や活動の幅、可能性が広がった」(43%)など。 ・グループインタビューでも、鑑賞事業だけでは得られない深い効果を指摘する声が多い。[学芸調査・グルイン/04年度] ・学校との連携事業への評価 [小学校を対象としたアンケート調査/07年度]<ul style="list-style-type: none"> ○事業経験者の約8割は、演劇を活用した事業が子どもたちに与える効果を実感。 ○具体的には、<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや気持ちを表現する力:80% ・豊かな感受性や想像力:61% ・人とコミュニケーションする力:52% については、効果を実感している先生が多い。 ○先生自身も「子どもたちそれぞれの個性や能力をより理解できるようになった」(72%)等の効果を実感。 ○事業をした先生で、今後の劇場との連携の意向も高い(連携したいと思う割合:83%)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「育つ」に対する観客および市民の支持率は高く、今後もこの基本方針の継続が望まれる。 ・ワークショップや講座参加者の事業に対する満足度は極めて高く、参加したことで鑑賞活動や日常生活の中に多様な効果が生まれている。 ・学校との連携事業については、演劇を活用した事業が子どもたちの表現力やコミュニケーション力への効果に期待が高い。長期的な視点で、まず事業の効果を立証するデータや情報を整理することが重要。 ・地域と連携した事業については、演劇を活用した事業が地域コミュニティに及ぼす効果など、長期的な視点で、事業の効果を立証するデータや情報を整理することが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事業参加者、関係する地域・施設等を対象とした意識・満足度・ニーズ把握のための調査の実施。 ・有効な定量的評価指標、定性的評価指標の検討。

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
<p>A-5</p> <p>【市民文化活動支援】</p> <p>市民参加型事業、貸館事業におけるアマチュア支援など</p>	<p>① ミッションに基づいた市民活動支援の実施</p> <p>② プログラム参加者の満足度</p> <p>③ 貸館事業に関するサービス内容、質への評価 (専門的・技術的なアドバイスやサービスなど)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 市民の文化活動支援については、創造事業や学芸事業と連携しながら、創造参加として市民が舞台に立つ公演事業やアウトリーチを実施。 09年度は、創造参加として、「シアターラボ」、合唱物語「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」、「人形劇俳優“たいらじょう”の世界」の4事業で70回のワークショップとアウトリーチが実施された。参加延人数・入場者数の合計は2,217人。 「シアターラボ」、「わたしの青い鳥」、「北九州パントマイム教室」の3事業は、03年度、04年度からの継続事業。 普及系事業③を参照 貸館利用者への専門的・技術的アドバイスについては、「技術スタッフの対応がよかった」は100%の大変高い満足度。 関連する項目として、「舞台設備機器が充実している」、「設備・機器などを安全に使用できた」、「舞台裏の施設・設備が使いやすい」も、それぞれ90%以上の高い満足度。 	<ul style="list-style-type: none"> 市民参加型事業には継続事業が多く、市民からの支持がうかがえる。 貸館事業における専門的、技術的支援については、ほぼ100%の高い評価。 	<ul style="list-style-type: none"> 貸館調査の継続。 市民参加型事業、アマチュア支援に関する調査手法の検討。
<p>A-6</p> <p>【地域経済などへの波及効果】</p>	<p>① 他分野への貢献や地域活性化を視野に入れた戦略目標の有無と内容</p> <p>② 学校等と連携したプログラム数と参加者数</p> <p>③ 参加者の満足度</p> <p>④ 地域外からの来場者割合</p> <p>⑤ 公演鑑賞に伴う消費行動</p> <p>⑥ 経済波及効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> 北九州芸術劇場では、開館以前から「シアタープロジェクト」として小学校を中心としたアウトリーチに取り組み、継続的な活動を実施。開館年度(03年度)から市内の延べ5つの区・市民センターを拠点に、「北九州ドラマ創作工房」を実施している。 09年度から立ち上げた「エンゲキで私イキイキ、地域イキイキ」事業では地域との連携を強化し、14回のワークショップで参加延人数が304人となった。 09年度に、学芸事業の中で実施したアウトリーチプログラムは、「学校出前演劇ワークショップ」、「ドラマ・ワークショップ」、「人形劇俳優“たいらじょう”の世界」など3事業。計31回のアクティビティを実施し、参加延人数の合計は1,676人。 普及系事業③を参照 07年度以降、北九州市および近隣地域以外の地域(福岡市を初めとする九州各地、山口県など)からの来場者の割合が増加。 ○地域外からの来場者割合 06年度:21% ⇒07:31% ⇒08:31% ⇒09:33%[観客調査/09年度] 地域外からの来場者は、従来はダンス・現代舞踊が多かったが、07年度以降はミュージカル・商業演劇、古典芸能など多様なジャンル・多様な年齢層で増加傾向。 鑑賞前後のショッピングの消費行動をみると、09年度の飲食・ショッピングをしている人の割合は59%。毎年ほぼ60%で推移。 ・飲食をしている場合の平均金額は約1,500円、ショッピングの場合は約4,600円。[観客調査/09] 09年度の経済波及効果を算出すると、 ○最終需要 劇場の運営管理:約6.7億円、主催事業:約3.1億円、主催事業の観客の消費支出:約1.8億円 (参考値)貸館事業に基づいた最終需要:約5.8~6.7億円 ※試算 ○経済波及効果 約17.0億円 (参考値)貸館事業に基づいた経済波及効果:約7.8~9.0億円 ※試算 経済波及効果の誘発係数は、 ○運営管理・主催事業・主催事業観客消費支出:1.46 ○貸館を含めた消費支出:1.42 04年度以降、運営管理・主催事業の誘発係数は、事業規模により1.45~1.47で推移。 雇用効果は、就業者ベースで137~145人、雇用者ベースで117~125人。 	<ul style="list-style-type: none"> 北九州市域外からの来場者が増加していることは、舞台芸術の鑑賞拠点としての北九州芸術劇場の認知度、評価が向上しているものと考えられる。 観劇に伴う観客の消費活動も活発。劇場の事業規模に応じた経済効果が発生している。 今後、集客のためにも、より劇場と地域(北九州の街、近隣商店街、大学等)との連携を深めるための、積極的な方策の検討が望まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域(地域経済)への波及効果の測定手法、評価項目の検討。 継続調査の実施、精度アップ(劇場管理運営費、事業費の振り分け、観客消費支出の精度アップ)。 所得増、雇用増、税収増の試算。 貸館事業に伴う経済波及効果の精度アップ(貸館事業者、貸館事業観客へのアンケート調査)。

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
A-7 [地域アピール、ブランド力のアップ]	① パブリシティ効果 ② 劇場・ホールを肯定的に考えている住民の割合	<ul style="list-style-type: none"> 北九州芸術劇場や劇場事業に関する09年度の記事掲載件数は177件。7年間のうち09年度は、開館年で話題性の高かった03年度(180件)に続いて多い掲載件数となった。 177件の新聞掲載記事を広告宣伝費に金額換算すると、09年度は約1億1,800万円(08年度:約1億2,600万円)「ハコブネ」、「江戸の青空」、「キャバレー」等の公演については、全国紙、北九州以外の地方紙でも紹介。 07年度以降は、換算金額は減少しているものの、自主事業を中心に、毎月コンスタントに記事が掲載され、件数を維持している。 <ul style="list-style-type: none"> 市民調査では、「これからの時代に必要な施設である」(46%)、「市の文化行政のシンボル」(35%)といった肯定的な意見への回答割合が高い。 劇場開設の効果として、鑑賞機会や日常生活の中で芸術文化に触れる機会が増えたとする市民が多い。 一方で、「情報が限られており、どんなことをやっているのかわかりにくい」という意見も多い(44%)。[市民意識調査/05年度] 劇場スタッフのインタビューでは、広い北九州市の中でどのように地域に劇場や舞台芸術を浸透させていくのか、劇場を応援してくれる市民をどのように増やしていくのかが、今後の検討課題としてあがっている。[劇場スタッフへのグルイン/08年度] 	<ul style="list-style-type: none"> 毎月コンスタントに掲載されていること、全国紙・地方紙でも事業が紹介されていることなど、劇場事業の定着と広がり进行评估。 新聞掲載記事の広告宣伝費への換算金額は、市の事業に対する補助金(約8,300万円)を大きく上回っており、北九州芸術劇場の事業や運営が高いパブリシティ効果を生み出している。 北九州芸術劇場に関して、肯定的な意見が多いことは高く評価。一方、広い北九州市域の中で、劇場や劇場事業に関する情報をいかに市民に届けるかが検討課題。 	<ul style="list-style-type: none"> より精緻なパブリシティ効果の測定手法、および劇場の情報発信力を把握する評価手法の検討。 長期的な視点(5年ごと、10年ごとなど)での市民調査の検討、実施。 市民の劇場への意識・ニーズをより詳細に把握するための評価手法の検討。
A-8 [広域施設の役割発揮] 圏域内の他施設の活動や文化振興に対する支援者の役割を果たします <small>*「広域施設」とは主に都道府県立の公立ホール・公立劇場を想定</small>	① 圏域内の市町村の劇場・ホールとの積極的な連携 ② 当該文化施設の運営だけにとらわれない圏域全体の文化振興	<ul style="list-style-type: none"> 舞台の専門家が少ない地域の公立ホールや公立劇場で、困ったときには北九州芸術劇場に相談したり、北九州芸術劇場を手本とする取り組みが生まれている。 「シアターラボ」「エンゲキで私イキイキ」といった「創る」「育つ」事業で九州圏域における演劇人の人材育成に貢献しており、北九州芸術劇場のプロデュース作品の九州圏域での巡回公演の可能性について期待する意見も多い。[九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09] <ul style="list-style-type: none"> 北九州芸術劇場の事業が、福岡市にも波及している。福岡のみならず九州圏域で、今後、どのように棲み分けや連携ができるのか、検討が必要である。[九州圏域の劇場・演劇関係者へのグルイン/09] 国のアーツカウンシルとは別に、地域版アーツカウンシルのようなものが北九州の文化振興ビジョンの中に入っているが、どのようにリアリティを感じさせるようにするかが大きな課題。[全国の劇場関係者へのグルイン/09] 	<ul style="list-style-type: none"> 今後、北九州芸術劇場が九州圏域に果たす役割には、より一層の期待が高まっている。 「北九州モデル」としての成功を、他の地方自治体に発信・波及させながら、次なる目標を確立し、それに向かって挑んでいくことが必要。 国や他の地方自治体(とくに九州圏域の県や市)との緩やかな連携も視野に入れて、地域版アーツカウンシルとしてのあるべき姿や北九州芸術劇場の位置づけを検討していくことが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> 広域施設の役割を担うための「次なる目標」としての事業方針と、その評価手法の検討。

B: 運営管理

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題	
B-1	[場の提供・支援 (貸館事業)]	<p>① ミッションに基づいた貸館事業の実施</p> <p>① 貸館における入場者数</p> <p>② 利用者の満足度</p>	<p>・貸館事業については、「創る」「育つ」「観る」の劇場の運営方針と並んで、地域の創造力を高めるための「創造支援」として位置づける方向性。</p> <p>・09年度の貸館公演・講演は233事業。計320回の公演・講演が行われ、入場者数は166,922人。</p> <p>・劇場利用に関する総合的な満足度は99%。今後の利用意向も99%と満足度はたいへん高い。</p> <p>・ソフトに関する9項目のうち、「開館時間が適当である」以外は、満足層の割合が95%以上。貸館事業におけるスタッフの応対への評価は高い。 [貸館調査/09年度]</p>	<p>・総合的な満足度、今後の利用意向ともに99%であることは、利用者からの大きな評価。</p> <p>・貸館事業のソフトに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。</p>	<p>・貸館調査の継続。</p> <p>・利用者の満足度に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。</p>
B-2	[施設のホスピタリティ・サービス]	<p>① 公演や催し物情報に関する満足度</p> <p>② ホスピタリティに関する満足度</p> <p>③ スタッフの応対や電話応対等に関する満足度</p> <p>④ 飲食に関する満足度</p>	<p>・開館年度(03年度)に満足度が低かった「公演情報の入手のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、09年度には80%以上の満足度となっている。 ○公演情報の入手のしやすさ 03年度:65% ⇒04:73% ⇒05:78% ⇒06:79% ⇒07:81% ⇒08:86% ⇒09:87% [観客調査/09年度]</p> <p>・開館年度に満足度が73%であった「劇場の入口・案内表示のみやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、09年度は88%に上昇。</p> <p>・「劇場やロビーのデザイン、雰囲気」は03年度から88%の高い満足度が少しずつ上昇し、09年度は96%。 ○案内表示 03年度:73% ⇒04:74% ⇒05:77% ⇒06:79% ⇒07:82% ⇒08:87% ⇒09:88% ○デザイン・雰囲気 03年度:88% ⇒04:91% ⇒05:93% ⇒06:93% ⇒07:94% ⇒08:95% ⇒09:96% [観客調査/09年度]</p> <p>・「劇場係員の応対」、「電話予約やチケットカウンターへの応対」への満足度は大変高い。特に、「劇場係員の応対」については、開館年度から90%以上の満足度を維持している。</p> <p>・開館年度(03年度)に満足度が低かった「チケットの予約・購入のしやすさ」は、04年度以降改善傾向が続き、09年度には80%以上の満足度となっている。 ○劇場係員の応対 03年度:92% ⇒04:97% ⇒05:98% ⇒06:97% ⇒07:97% ⇒08:97% ⇒09:98% ○電話・チケットカウンター 03年度:80% ⇒04:91% ⇒05:93% ⇒06:92% ⇒07:93% ⇒08:95% ⇒09:96% ○チケットの予約購入 03年度:53% ⇒04:73% ⇒05:79% ⇒06:80% ⇒07:83% ⇒08:90% ⇒09:86% [観客調査/09年度]</p> <p>・劇場ロビーの飲食サービスの満足度は70%台後半で推移し、09年度は86%である。 ○飲食サービス 03年度:69% ⇒04:78% ⇒05:79% ⇒06:77% ⇒07:80% ⇒08:83% ⇒09:86% [観客調査/09年度]</p>	<p>・高い満足度は堅持し、低い満足度は大きく改善している。開館から7年が経過し、観客が劇場や鑑賞活動に慣れてきたこともあろうが、劇場側の工夫と努力が大きいと考えられる。</p> <p>・劇場のホスピタリティ・サービスに関する評価は大変高く、今後もこのサービス内容・質の維持が望まれる。</p>	<p>・観客調査の継続。</p> <p>・観客の意識・満足度・ニーズ把握に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。</p>
B-3	[施設の維持管理]	<p>① 施設の維持管理</p> <p>② 稼働率</p>	<p>・貸館調査でも、劇場の施設や設備などハード面で利用者からの満足度は大変高いが、搬入・搬出のしやすさについては複合施設でエレベーターを使用することから、他の項目に比べて満足度は低い。満足層の割合は次のとおり。 ○館内は清潔に保たれていた:100% ○設備・機器などを安全に使用できた:100% ○舞台設備・機器は充実していた:99% ○楽屋など舞台裏の施設が使いやすかった:97% ○搬入・搬出がやりやすかった:92% [貸館調査/09年度]</p> <p>・施設稼働率は、大ホールが74%、中劇場が82%、小劇場が84%である。</p> <p>・開館年の03年度を除き、3つのホールの稼働率は約70~80%で推移。全国平均(専用ホールのうち政令市施設の平均稼働率は72%)と比較しても高い水準。</p>	<p>・劇場利用者からの施設・設備の維持管理に関する評価は大変高く、今後も安心・安全な施設利用への取り組みが望まれる。</p> <p>・スタッフからは、中長期の修繕計画が課題としてあげられている。</p>	<p>・貸館調査の継続。</p> <p>・利用者の評価に関する定量的評価指標、定性的評価指標の検討。</p> <p>・施設の維持管理に関する詳細調査の検討。</p>

C: 経営

評価大項目	評価指標・基準	調査結果・評価データ ※[]内は調査名・調査実施年度	評価結果・改善のポイント	事業評価に関する今後の課題
<p>C-3</p> <p>[経営努力]</p>	<p>① 外部資金、チケット収入の割合</p> <p>② 事業収支からみた経営努力</p>	<ul style="list-style-type: none"> 09年度事業費は約3億1,000万円。財源内訳は、チケット収入:約2億200万円(65%)、外部資金:約2,400万円(8%)、市の補助金:約8,300万円(27%)。 チケット収入と外部資金の03年度からの比率をみると次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> ○チケット収入 03年度:54% ⇒04:43% ⇒05:37% ⇒06:61% ⇒07:52% ⇒08:42% ⇒09:65% ○外部資金 03年度:18% ⇒04:20% ⇒05:22% ⇒06:14% ⇒07:14% ⇒08:15% ⇒09:8% 全国平均の試算値と比較すると、チケット収入割合(全国平均:37%)が平均を大幅に上回る。09年度は、導入する外部資金の割合については、北九州芸術劇場の実績よりも全国平均(11%)が上回っている。 09年度の文化振興特別会計の収入の部の決算報告では、予算額と決算額の差は、予算額を約4,400万円上回る事業収入があり、補助金収入は予算額から約8,800万円削減されるなど、経費削減、営業努力がうかがえる。 	<p>・チケット収入の割合の高さなど、劇場の営業努力、運営努力の成果として評価。</p>	<p>・継続したデータ収集・分析の実施。</p> <p>・詳細調査の必要性の検討、実施。</p>

※C-1 経営体制、C-2 リサーチ&マーケティングについては、調査や評価の方法を含め、今後の検討課題である。